81-575

文學博士 元良勇次郎 著

現今將來 倫理及宗教

東京 勉強堂藏版

現今及將來の倫理及宗教

文學博士　元良勇次郎著

第一章　緒論

現今吾國に於ける倫理及宗教問題は甚だ複雜にして頗る解釋を要するものなり而して其解釋の如何は將來の國民發達に大影響を有する者なることは世人の均しく認識する處なり隨而之れが解釋を試みんとするものの亦た鮮からずして實際之れが解釋を望むもの亦甚だ多數なりと雖も未だ一も滿足なる解釋を得たるものなきは詢に嘆すべきなり此の如きは吾國の思想界の猶ほ幼稚なるに由るか抑此等の問題は深遠にして容易に之れを解釋すること能はざるに由るものならん

か然るに現今特に世人の注意を惹起したるは昨年十二月哲學雜誌上に宗教の將來に關する意見」と題せる井上哲次郎氏の論文と今年三月の哲學雜誌上に村上專精氏の起草に拘る「二十世紀に於ける宗教」と云へる論文を出されたるとにして尙

ほ近くは福澤翁が修身要領廿九條を發表して一般世人の修身處世の道を紹介せられたる等は其重なるものなり而して此等三氏の所論に就きて吾が同胞が如何に之に反動したるか如何に噴々を極めたるかを觀察するときは如何に吾が國の思想界が此種の問題に關する解釋說明を渴望したるかを察することを得べし抑人生觀世界觀に關する問題は自ら相互に連關して之を宗教問題及び倫理問題に區別することを得べしと雖も亦た自ら密接なる根原共通のものあれば今假りに宗教問題と倫理問題とに岐ちて此等に關する予の平素思ふ所を述べて以て世人の批評を請はんとす

第二章　我が國の思想界と世界の大勢との關係

四洋文明の輸入と其の消化、四洋の思想界は低氣壓の中心なり、四洋文明思想の沿革、拾九世紀文明の特色

吾が國現今の文明は其狀態甚だ複雜にして其中には種々の要素を包含すべしと雖も特に明治以後の文明に關して其尤も近因となりたるものは西洋諸國と交際を開き其の文明を輸入したるにあることは世人の一般に認知する所なり然りと雖も若し其文明を輸入したるのみにて未だ其文明の文明たる所以のものを處理し之を消化するの腦力無からんには如何に多くの新文明を輸入したればとて今日の文明の域に達する能はざりしや明らかなりすべて智識藝術孰れに拘らず此れを我が物の如くなさんには此れを迎ひて我れに移したる當にては未だ可ならず必ずや此れを培養し之を陶汰し此れを消化し得て初めて吾が智識吾が藝術とも稱し得べきものなり換言すれば受動的の智識藝術は眞の智識藝術と云ふ可き價値あるものにあらず只だ彼れは能働的活用的のものとなりて初めて眞正に智識藝術としての價値を有するものなり左れば孔夫子も學問を修めんとする後進子弟の箴言にとて曰はく好之者未不如樂之者と然らば即ち現今吾が國の文明中主なる二大要素とも云ふ可きものは數千年來吾が國に於て發達せられたる文明の結果として大に思想の修練を得たるは即ち其一にして之に對し西洋の新思想を輸入したること亦た其一なり此新思想輸入に依て吾國の思想界は全然一變し

第二章　吾國の思想と世界の大勢との關係

西洋の思想界は低氣壓の中心なり

倫理宗教上の思想より國家の組織風俗に至るまで大に其面目を改むるに至れり

論者或は言はん今日の吾が國の狀態は所謂過渡の時代にして舊思想去り新思想の未だ到らざるが故に萬事不整頓なりと雖も愈年を經るに隨ひ漸々整頓するに至るべきものなれば敢て之を患ふるの要なし其時來れば社會の狀態は自ら其秩序を正すに至るべしと此論素より一理なきに非らざれども今日の社會は過渡の社會なることは疑ふ可らざる事實なりと雖も亦退いて考ふるに果して此れを目然の進行に放任して敢て人爲を用ひず只管社會の整頓し思想界の定まるを俟つ可きものなるか再言すれば所謂過渡の時代なることを楯として吾人の心を安んじ得べきものなるや否や之れ少しく吾人の注意を要すべき點なりと信ず

今夫れ本邦現今の狀態を察するに社會活動の大部分は自家の必要に應じて自己自身の性質上より自然に發達し來りたるものに非らずして寧ろ外他の者より促がされて動き始めたるものゝ如し之を空中の現象に喩ふるに或る一地方に暴風の起りたるが如し暴風雨なるものは素より物の內部より起るものに非らずして外部より來るものなり然かのみならず其暴風雨の如何にして起りたるものなる

やの根元を精密に研究せんと欲せば先づ宏く各地方に於ける氣壓の工合及び風の方向等を精細に研究し孰れの處に低氣壓の中心を生じ其中心は又た孰れの方向に向て動搖したるや等の事柄をも研究して初めて暴風雨の根元を明かにすることを得べし社會文明の活動を以て敢て之を暴風雨に比較するは少しく允當を欠くの嫌あるべしと雖も然れ共或る意味に於ては之を較するも決して大なる誤には非らざるを信ず果して然らば現今の吾國に於ける社會活動の變化は其源淵孰れに存するやと問ふに低氣壓の中心は即ち歐米に在ること明らかなり故に吾が思想界の現時の變化の性質を究めんと欲せば先づ西洋の諸國の思想界は如何に變遷し來り又た如何に變遷しつゝあるかを明らかにすることを得べきなり

抑アリアン人種の思想發達の順序特に倫理及宗教に關する思想の發達を考ふるに彼等と雖も其古代に於ては多神教を信じ而かも迷信の其中に存するもの決して少々に非らず或は又た道德思想に於ては古代の狀態は正義の觀念を以て最も高等なる道德――至德――至善なるものと見做し「善を以て善に償ひ德に報ゆる

に惡を以てすとの主義を以て一貫せんとを勉めたるものなり然るに一神敎なる思想漸次國民の腦裡に發達し特にキリスト敎の要旨漸く傳播せらるゝに及では宗敎に於ては全然一神敎を信ずるに至り多神敎信仰の熱度は遙かに氷點の下に降れり蓋し多神敎と一神敎とは其敎義の深淺優劣較せずして明らかなるものなれば一神敎の敎義の此當時如何に彼等の宗敎思想を統一する上に於て無限の勢力を有したるかは推し測られて明らかなるものならん然れ共文明の進歩にはリズムの法則ありて或は暫時の間に在りて急進し或は又た數百年間の長きに渉りて漸く僅かなる進歩をなしたるもののありて萬遍皆な一樣なるものに非らず即ち歐羅巴の歷史に於ける中世時代の如きは其著明なる例にして明らかに後者に屬す此時代に於ては或は將來發達せんとするの用意をなしつゝありしなるべしと雖も兎も角も外部より之を觀察する時は其進歩素より遲々たるものにして潛伏時代たりしは到底疑を入る可らざるなり左れば斯かる時代に於ける宗敎は勿論消極的にして彼等をして只だ僅かに一神敎の命脈を繫がしむるのみに止まりたりと雖も又た徃々却て愚民を導きて迷信に陷らしめたるが如きは亦た少からざりき如此有樣なりしが故に人民の思想は只だ古來傳はり來りたる所以のものを保有し持續することにのみ戰々是れ勉め少も活々たる新思想の發芽を促がすが如きは夢想だにせざりし所なりと信ず之を吾が邦の文明に比するに恰かも儒學及び徵弱なる東洋思想が永く國民の腦裡に浸み込み彼等の思想を唯一消極的に束縛して些の發展を爲さしめざりしに均し然るに時運漸く進みて現世紀に及びては事物各般の發明或は新思想傳播の機會漸く熟しコロンバスの亞米利加發見が全歐州民の眠れるを醒ましゝを初めとし幕で機械の發明及び種々學理の發明起り歐州の天地茲に全く一變し陰々たる天地は即ち露々たる新天地となり欝々たる社會は實に勇壯活潑なる社會となりしかば國民一般の思想も亦た自ら蠢動を初め因循の笠を脫し姑息の褥を捨て社會の狀態は翕然として自由思想の開展に向ひ徒に古來の傳說のみを墨守し固執保守の一方に傾くは非理の最も非理なる所以を覺り遂に新思想革明の機を見るに至れり而して今其倫理宗敎思想に關する方面に就て考ふるに古來の獨斷的思想敎權的敎義は終に自由研究即新思想の爲めに壓せられて其餘喘を絕ち更らに一新世紀を開らくに至れるものゝ如し

如何となれば新舊兩運の錯綜素より書一に此れを分解する能はずと雖も特に讀者の注意を惹かんと欲するもの二あり其一は即ち物質的文明の長足的進歩なり抑物理學なるものは古來學者の思想を引き特に希臘文明の盛なる時代に於ては アモクリタス あり羅馬文明の盛なる時代になりてはルクレシヤス ありしと雖も然れ共此等の時代に於ては學者も國民も其の思想甚だ幼稚なるものにして假令稍文明的に其方向を執りたるにもせよ哲學詩歌等に關してこそは世人の注意を惹き起したれ物理學の如き精密顯微の科學に關しては尚ほ等閑に附し去られヂルト兩氏の如きは其當時に在ては未だ一般世人の認知する所とならず隨て兩氏の研究の如きは價値なきものと認められたるが如し爾來或はガッセンヂ コント 現はれニュトン出で種々の一經驗に訴へて萬象の變化を紹介せらるゝに及びては世人の注意全く此一方に傾き物理現象の研究は愈々益々妙味の存するものなりとなし遂に十九世紀の文明史中物質的方面の進歩も亦た優に一地位を占むるに至れるなり此の如く一方に於て物理思想の發達すると仝時に他の一方に於ては倫理宗教の思想界は益々自由研究を營み古來の獨斷的數權を脱して如何にもして新思想の發展を盛ならしめんと勉められたり特に哲學宗教に關する方面に在ては其熱度愈々高かりき即ち古代に於ては宇宙に獨立の眞神ありて宇宙を支配するものなりと信じ之れに服從するは人類の義務なりと思惟したるが故に彼等の思想に由れば宇宙の活動は一切皆な神の意志に基づけるものなりとなせり然るに物理學の發達は自然法の有するを認め宇宙の現象も亦た必竟此自然法に依て秩序正しく活動するものなることを發見するに至りたるが故に神が直接に宇宙を支配しつゝありとの思想は大に其趣きを異にするの已む能はざるに至れり而かのみならず其神の存在するや否やの事に就ては科學的に之を研究する能はず唯だ形而上に渉りて此れを信ずるに止まるが故に科學的、――哲學的――自由研究の盛なる時代に於ては又神の存在をも疑ふの念往々世間に行はるゝことゝなり結局宇宙に神の存在するものなりとの定論を沒却し唯一自然法と云へる秤尺を以て宇宙の森羅萬象を說明せんとするの思想一般に激昂したるが如しと雖も然れ共宇宙の變化は其形狀頗る微妙にして人類の常識を以ては如何に其知識進歩したればとて未だ宇宙の諸現象に對して悉く自然科學の所領の如く自

然法のみを以て說明し得べしとなすは吾人の到底希望し能はざる所なりとす此に於てか歐羅巴の全思想界は遂に復び動亂を初め大改革を起すの時期到來するに及びては神に對する觀念は愈〻迷誤曖昧の姿となり舊來の傳說に由りて建設されたる如き god なるものありて宇宙を支配しつゝあるものなりとの思想は其根據甚だ微弱にして苟も普通常識あるものは到底滿足する能はず左ればとて宇宙の變化を一束して悉く自然法のみに訴へて說明せんとするが如きは成し能はざるのみならず又た實際上希望するだに無理なることなれば此時に際しては歐州全國民は全く五里霧中に彷徨し擧げて不安の狀態に沈まんとしたるが故に遂に哲學者は一種の活路を發見し交々起て新說を起し神は存在す神の存在は否定すべからずとなし更らに神即ち god の性質に就きて一種の新說明を試みたり其說に曰はく

神(god)は古來萬人の信じたるが如く吾人と全じく喜怒愛樂の情を以て人に臨む者にあらず只人爲を以て宇宙現象の秩序を說明せんが爲めに茲に神の存在を假定したるものなり而して此假定たるや偶然の出來事に非らずして吾人の要求に依りて假定したるものなり精神の必要上是非共神の存在を假定し限りなき人類の希望を托し安心立命の思をなさんとの念より來りたるものなり尙此意味を以て神の存在を主張するに至りたるは重に歐州地方に於て起りたる事なるが或は又た東洋思想の少しく之に混和するに及びては所謂宇宙神教なるものを生ぜり今其教義とする所のものを見るに宇宙の實體は即ち神なり神と云ふも宇宙を離れて別在するものに非らず宇宙夫れ自身が即ち神なり此故に人も又た神の一部分なりとしたるの〻如し然りと雖も此の如き理想は只だ僅かに一部の人に依りて信仰せらるゝを得たりと雖も未だ社會全般に通じて認知せられたる理想には非さりき其漸く一般に涉りて神と宇宙の一體を認むるに至りたるは極めて近時の事にして近世物質的文明の變動と自由思想の發達とは人をして益〻天眞爛熳の至域に至らしめ傳說及び獨斷的教權の羈絆を脫して人間自然の活動を基礎となしたる結果近來愈〻社會的活動の勃興するに隨ひ所謂社會なる觀念は漸く一般の人心に認識せられたれば宗教的思想の上に於ても大に之が影響を感染し其極遂に宗教的教義を解するに幾分か社會的に之を說明せんとするの傾

向甚だしくなりたるなり宗教の社會的說明とは他なし即ち宗教の假設したる神は人を離れて別に宇宙に存在するものに非らず宇宙活動中最も高尚優美なるものは人間の精神なり此の精神——此微妙なる活動を有する人間の最も能く發達したるものは即ち社會活動なり故に社會活動は個人活動に比して一層複雜なる活動にして個人活動の尙一層發達したるものなり此意味に於て世人は社會活動に服從せざる可らず蓋し社會活動とは個人以上個人以外の活動をして悉く調和統一せしめたる一國の名稱なり此調和統一に因りて初て人道を生ず而して宗教は此理に基づきて人道の妙味を敎誨するにあれば宗教の楯となす所のものは即ち社會活動を以て骨子となすものなり宗教の敎義となす所のものと亦社會の活動とは互に相助け相共に矛盾せざるものたらざるべからずと說く此れを稱して宗教の社會的說明とは云ふなり言を換へて此れを言へば歐州の宗敎思想は其初め敎權的——獨斷的——傳說的思想より起りて中世一度物理的研究の盛なる結果として自然法の適用に苦しみたりしが近世に至るに及びては更らに此れを社會的に解明し遂に社會活動の成行に合し人の進步を助け其發達を益するを以て

宗敎の眞目的となすべきものなりとなすに至りたるなり

終りに臨で尙は一言すべきは十九世紀に於ける歐米大陸文明の特色とも云ふ可きもの之なり此事たるさきに述べたるが如く已に自由思想の發達と相轉換したる所なりと雖も特に世人の注意を求めんと欲する所以のものは此章の初めに於て述べたるが如く古代のアリアン人種の道德は唯だ〳〵正義の觀念を以て至德に正義の觀念たるや素より道德上の一善行たるには相違なしと雖も敢て此を以て人文の發達上最高なる至德となすは誤れり其詳細なる理由は姑らく此れを後章に讓ると雖も兎も角も至德の範圍中には正義の觀念よりは尙ほ夫れ以上に博愛慈善等の達德亦た決して忘る可らざるものなり然るに文明の進步未だ茲に至らざるの時に於ては已に基督敎佛敎等の如き敎義の存在するにも拘らず獨り正義の觀念は比較的に一般人民に解釋せられたりしと雖も未だ博愛、慈善心の如きに至ては何人も之を唱導したるもの殆ど之れ無きが如き姿なりき獨り十九世紀の文明は即ち然らず彼れは正義の觀念を奬勵すると仝時に博愛、慈善心等の如き

觀念の發達をも促がし其進歩發達大に見る可きものなるに到れり此れ素より歐州に於ては基督教の教旨も亦た慥かに之れが導火線たりしや疑なしと雖も若し獨り基督教の教旨のみに依りて博愛的慈善的觀念の發達を見たるものなりと言はゝ何が故に今より千八百年の大古即ち基督教の紀元に於て全じく博愛的慈善的觀念も亦た萌牙せざりしかを疑はざるを得ず而かのみならず其以後に於て基督教布教の目的を以て建設せられたる教會中に在りて尚ほ且つ此事なく却て博愛慈善の趣旨に反するが如き行爲ありしは歴然として蔽ふ可らざる事實ならずや然らば即ち博愛の博愛たる所以を了し慈善の慈善たる所以を解し或は赤十字の設あり將た感化院孤兒院等の創立を見るに至らしめたる原動力は必らず基督教以外に其存在を認めざる可らず原動力とは他なし十九世紀に於ける人文の進歩社會の發達等種々なる要素悉く備はりて初めて茲に至れるなり此故に予は將さに曰はんとす歐州十九世紀の文明を促がしたる所以のものは獨り宗教的方面に限るに非らず又た倫理的方面のみを限るにも非らず宗教と云ひ倫理道徳の方面と云ひ共に俱に改新せられ變革せられたるは其因素より傳説的宗教の感化力亦與りて力あるべしと雖も之れが主因をなしたるものは擧げて此れを一般人文の進歩社會文物の發達に歸せざる可らずと

以上は歐州文明國の社會的思想變遷の一部を執へて論議したるものなりと雖も退いて吾邦現今の思想界が如何に變動しつゝあるかを考ふるに已に前にも述べたるが如く吾邦現今の文明は主として歐州の低氣壓より其影響を受けたるものなるが故に其變遷の有樣素より彼を抽寫したるに止まるものなれば宜しく讀者の推測に一任する事となさん予が敢て此章に於て吾國思想界の變遷を説かず歐州の文物發達の順序を紹介したる所以のものは吾が國思想の變遷と歐米思想の變遷とは密着の關係を有するものなることを知らしめ以て後章の前提となし置く必要あるを認めたればなり

第三章　井上村上兩氏の所説に就きて

目下宗教問題の狀態、井上博士の所説、村上博士の所論、所論の衝突、衝突と予が希望、結論、

第三章　井上村上兩氏の所説に就きて

目下宗教問題の狀態

人は感情的動物なり今日雀躍の欣あるかと思ひは明日は即ち慼々の憂に沈むは古往今來共に異なることなし此故に如何に高堂玉樓に登ればとて玉食甘昧に其口腹を飽かすにもせよ苟くも生を此世に受けたらんものは喜怒愛樂の感情を離る可らず而して此感情中特に勢力の大なるものを運命に關する恐怖警戒の念となす此一念こそ上下の別なく東西の撰なく豈となく夜となく終始吾人人類の念頭に宿泊して時々警醒を發す此れを名づけて宗教的感情と云ふ已に此宗教的感情は人類の固有なるものにして亦勢力の偉大なるものなりと定論したらんには此固有的感情之を起さざらんと勉むるは吾れは夢なからんと勉むると均しく妄想も尙は甚だしきものなり左ればとて徒らに運命の進行にのみ顧慮して一事を爲し一業を營むにも現在を離れて以往を想像し吾れ今此一事を營むも寂滅の風やがて吾が身に吹き至らば具体の蟬殼を脫りて何れ如何なる處にか到りなん抔考いたらんには是れ亦た始末に終へぬ事なるべし生々滅々の世界は遂に死々滅々の燼灰世界と化し去らんのみこは少しく外事なれ共凡國民の思潮の攪亂動搖は直ちに國家の膨張國運の進暢に其影響を及ぼすものなれば極端に宗教的感情を助長せしめて日々戰々競々薄氷を踏むが如き生活を遂けしむるは遠からず國家の進運を縮少ならしめ國民の元氣を阻喪せしむるや必然のものなれば此策は國家進運の方面より考ふるも將た科學的見地の上に立ちて心理的機能の方面よりするも共に就る可らず而して此反對に人に宗教心なからしめんとするは亦た科學上實際上爲し能はざるが故に近來宗教及倫理問題に關する論議は一層世上囂々の態度を示し或は宗教と云へる意義若くは倫理の定義に關ひ或は人生の實体宇宙の本体に相搏し特に宗教的方面に對しては近者或は其教義に於て或は客觀的崇拜物の性質に關して戰亂攻伐の光景一層劇烈を呈するに至りて迄でも宗教と云へる題目の下に於て或は倫理道德と云へる命題の下に於て種々なる秤尺を持し種々なる理想を翳ざし如何にもして現時及將來に於ける新宗教を按出せんとの希望は殆ど明治學界全社會を掩ひ去り今に至て國民の安堵國民の立命の地を發見する能はざるは主として其問題の廣遠にして此れを研究すること困難なるに因るものなるべしと雖想へば實に科學世界の爲め帝國民庶衆の爲め眞に嘆息の感を起さずんばあらざるなり此の如く學者識者の宗教及倫理問題に關

井上博士の所説

する攻究の歩高きそが中に就きて予が最も有力なる論説と認めたるは素より多數にして之に關する諸說を一々之を評論せんば徒らに煩雜に渉るの嫌あるのみなれば特に井上村上兩博士の所說を評價し以て後段予が宗教道德觀を發表する伏線となさん

井上博士は先づ宗教の將來に關する意見と題して之れを(一)論及び(二)現今の宗教の狀態以下(三)教育界に於ける目下の缺點、(四)各宗教の長處短處(五)各宗教の根柢に於ける契合點と云へるに從がへ更らに轉じて倫理の將來に渉り(六)効力ある倫理主義と云ふ項を擧げ再び宗教の取るべき將來の變形と云へる項目を設けて盛んに特有の論議を試み最後に將來の宗教と日本主義と云へるに其立論を納められたり項を累ぬること八論述の精巧なる所眞に感服の外なし試みに博士が全文の要點に就きて一々其論ずる所を擧げんに先づ氏は現今の宗教の狀態と云へるに曰はく「德川時代に盛況を呈したる儒教も維新以後頓に勢力を失ひ今日に至りて其衰運特に甚だしとなす宗教は人に依りて存するものなり然るに方今の儒者中道を以て自ら任ずるもの果して幾人かある僅かに二三衰殘の老儒ありと雖も眞に日暮れ路遠しの感なくんばあらず」とて殘腐の儒教が喘々焉たるを指摘す予も亦た同感を表す其他或は佛教を評して「是れ亦た單に殘骸を留むるのみ其狀眞に氣息奄々として死に瀕するが如し」と云ひ基督教を評して「薇微振はず」となしたる等素より其大体に於ては異論なし次ぎに教育界に於ける目下の缺陷と論じたる所是又た異論なし第四各宗教に於ける長處と云ふに一々儒佛基督等各其長處とする所あると同時に亦た其短處を滅するを要がへたるも予亦た之を諒す而して各宗教の根底に於ける契合點と云へるに曰はく

儒教と云ひ佛教と云ひ基督教と云ひ凡そ此等の諸宗教は其歷史を異にして發達し來れるを以て何れも其特種の性質を有せざるはなし是を以て其徒動もすれば輒ち相排擠せんとす局外より之を見れば其我を是として彼れを非とするの一點に至りては毫れ異なることなきなり若し彼等にして一度諸宗教に於ける根底の上に於て互に契合點の存するものなることを看破するを得ば彼等の迷妄は忽ち夢の醒めたるが如くに消散し心境恍惚として縹渺たる別世界を瞥見するを得ん

とて先づ虹の如き氣焰を吐き更らに進みて愈々各宗教の根底如何を査察すと稱して語を繼げり

抑〻宗教が如何にして起りしかと云ふ史的考察は姑らく之を置き今の諸宗教は現に如何なる根底を有するか換言すれば何等の基礎によりて成立せるか此點に就きて吾人の考察を要するものあり吾人の見る所によれば今の諸宗教は皆實在の觀念を根底とす若し實在の觀念なからんか何れの宗教も意味なきものとなるなり要するに今の諸宗教が如何に相互に異なれりとするも其實在の觀念を基として建設され居ると云ふ一點に至りては一なり

即ち各宗教に於ける相互の契合點は其宗教の根底となせる實在の觀念に在りと云へり實在の觀念とは如何なるものなるか氏は次ぎに說明を擧げたり

實在其れ自身は言語を以て形容し得らる可きものに非らず又た文字を以て敘述し得らる可きものにあらず眞に依心傳心のものなり然れども是れ實に世界及人生觀の極處にして一切の道義茲に淵源するが故に如何樣にしてか之を言語と文字に表はし得べからざるものを强ひて表はさんとするが故に各〻其見る所により唯だ〳〵僅かに近似せる觀念を言語と文字に表はせり

故に言語と文字に表はされたる實在は種々なり然れども何れも實在の觀念を有して此に至れるなり寫象の特種なるは其人の偶然の境遇然らしめたるものにして實在其れ自身の異同を指示するにあらざるなり實在は一なり唯だ之が觀念を得るもの樣々に言ひ表はせるのみ

と即ち同氏が實在の觀念とは世界觀及人生觀の極緻極美なる處なりと云へるに依れば之れ佛敎の佛(god)を述てたる所以の原理を指したるものにして抽象的に之を自覺し得るとするも具象的に之れを紹介し之を說明するに至れるものなることを知らしめり而して氏は更らに進みて現今各宗敎が此の實在の觀念を現はすに如何なる言語如何なる文字を以てしつゝあるかを說明して曰はく

實在の觀念如何に數多なるも包攝して之を約すれば分ちて三種となすを得べし即ち左の如し

第三章　井上村上兩氏の所說に就きて　二一

第一人格的 Personlich
第二萬有的 Pantheistisch
第三倫理的 Ethisch

凡そ人は如何なることに關しても己れを標準として推測するの傾向を有するを以て世界の實在をも人格的に抽寫せり(一)婆羅門教に在りては實在を梵天と名づけて之を二樣に寫象し一を「ブラマ」と云ひ一を「ブラフマン」といへり其「ブラフマン」と云ふは人格的の梵天にして其「ブラフマン」と云ふは無人格的の梵天なり即ち前者は個体を成したる神靈として寫象するものにして差、具躰的の性質を帶び後者は萬有的の本体として寫象する所のものにして全く抽象的なり婆羅門教の哲學に云ふ所の梵天は後者を意味す故に梵天を高等梵天と劣等梵天とに分ち兩者の區別を明らかにせり(二)佛教に在りては甚だ婆羅門教に類似するものあり實在を人格的に寫象して之を但他揭多即ち如來と稱し又萬有的に寫象して眞如とす即ち世界の實相なり如來は宮に人格的に寫象せらるゝのみならず又此階級を超過して神人同形的に寫象し遂に之を物象に表現するに至れり

(三)基督教にありては實在を人格的に寫象し所謂「ゴット」は個体をなし意志を有し冥々の中に在りて人類の禍福を左右するものとせり但し實在を萬有的に寫象することは基督教の精神にあらず固より哲學の方面に在りてはヂオルダノ、ブルノー、スピノザ諸氏の如く純然たる萬有神教を主張するものなきにあらざるも基督教は決して然らず基督教に在りては實在は到底人格的たらざる可らず猶太教も此點に於ては基督教と異なるなきなり(四)儒教に在りては實在を人格的に寫象することなく古代より之あり經書の中に天帝と云ひ上帝と云ひ又單に天と云ふ者皆な意志を有せる個体にして人事界の事に干渉し得るものとして寫象せり今一々證據を擧ぐるに遑あらざるも其事已に明瞭なりと謂ふ可し然るに又た實在を萬有的に寫象することもあり即ち易に所謂太極は世界の本体にして一切現象の依りて生ずる所なり然れども一切現象は遂に太極を離るゝ能はざるなりこれに依りて之れを見れば實在を人格的に寫象するの一點に至りては各宗教共に一致せり但し萬有的に之を寫象するとは婆羅門教佛教及儒教に共通なるも獨り基督教は例外に屬す已に此事實を明晰にしたる以上は更

らに之に就きて論述すべきことあり

即ち氏の説に随へば苟くも宗教たる資格を有するには必ずや實在の觀念を有せざる可らず而して此實在の觀念たる實に宗教の宗教たる絶對價値の繫る所にして此れに古來より現今を通じ約そ三種の各相異なりたる表示の方法あり一は即ち動作的——個体的の性質を有する人物と見做すものと他は抽象的——虚無的の性質を有する萬有的——普遍的のものなりと抽寫し或は亦た活動的——變化的——生々的性質を有する倫理的——人文的——社會的趣味を帶びたるものとの三種なりとせらたり今更ら之れが是非を呶々するの要なし唯だ是等三者の實在的觀念が將來科學の進歩人文の發達に伴つて孰れが最も能く主張せられ歡迎せらるゝか換言すれは佛、耶、儒は皆此等の實在的觀念を有することなるが將來果して全盛を極め宗教舞臺を獨占するものは孰れの教義ならざる可らさるかの問題こそ現時吾國の思想界を統一調和する上に於て最も焦急の問題なればこれぞ一層の注意を以て聞かんことを望むものなり而して今や氏は最後の裁斷を下さんとして頗る嚴肅なる語調と愼重なる態度とを以て將來宗教舞臺に於ける是等三者の優劣を占はんとして先づ初めに人格的實在の觀念の到底成立し能はざるを斷ぜり今其理由とする所を見るに曰はく

實在を以て人格的に寫象するは未だ高尚なる哲理を了解すること能はさる幼稚なるものゝ事にして到底智識の發達に伴ひ難し何となれは人格的の觀念は實に種々なる迷信を惹起するの傾向を免れざるのみならず又た到底免る可らざる論理上の困難に遭遇するを免れず今其重要なる點を擧ぐるに

第一　人格的の實在は必らす個体を成さゝる可らず若し個体をなさずとすれば是れ固より人格的と云ふ可きものに非らず此故に人格的の實在は必らず個体をなすものなり然らば其個体は如何なる個体なるか吾人が通常個体と稱するものは皆形体を有するものなり然れども人格的の實在に形体ありとは思惟す可らす此故に唯だ〳〵抽象的に寫象して之を一個の精神と謂はざる可らず然れども吾人の經驗によれば精神は只だ〳〵形体に附して存するのみ形体を離れて獨り精神のみ存在すべきことは何によりて證明す可きか何等の證明もなくして單に假定するが如きは其人の想像に過ぎず素より眞理と云ふ可きも

らに之に就きて論述すべきことあり

即ち氏の説に隨へば苟くも宗教たる資格を有するには必ずや實在の觀念を有せざる可らず而して此實在の觀念たる實に宗教の宗教たる絶對價値の繫る所にして此れに古來より現今を通じ約そ三種の各相異なりたる表示の方法あり一は即ち動作的——個体的の性質を有する人物と見做すものと他は抽象的——虛無的の性質を有する萬有的——普遍的のものなりと抽寫し或は亦た活動的——變化的——生々的性質を有する倫理的——人文的——社會的趣味を帶びたるものとの三種なりとせらたり今更ら之れが是非を呶々するの要なし唯だ是等三者の實在的觀念が將來科學の進歩人文の發達に伴つて孰れが最も能く主張せられ歡迎せらるゝか換言すれば佛耶儒は皆此等の實在的觀念を有することなるが將來果して全盛を極め宗教舞臺を獨占するものは孰れの教義ならざる可らさるかの問題こそ現時吾國の思想界を統一調和する上に於て最も焦急の問題なればこれぞ一層の注意を以て聞かんことを望むものなり而して今や氏は最後の裁斷を下さんとして頗る嚴肅なる語調と愼重なる態度とを以て將來宗教舞臺に於ける是等三者の優劣を占はんとして先づ初めに人格的實在の觀念の到底成立し能はざるを斷ぜり今其理由とする所を見るに曰はく

實在を以て人格的に寫象するは未だ高尚なる哲理を了解すること能はさる幼稚なるもの、事にして到底智識の發達に伴ひ難し何となれば人格的の觀念は宵に種々なる迷信を惹起するの傾向を免れざるのみならず又た到底免る可らざる論理上の困難に遭遇するを免れず今其重要なる點を擧ぐるに

第一　人格的の實在は必らす個体を成さゝる可らず若し個体をなさずとすれば是れ固より人格的と云ふ可きものに非らず此故に人格的の實在は必らず個体をなすものなり然らば其個体は如何なる個体なるか吾人が通常個体と稱するものは皆形体を有するものなり然れども人格的の實在に形体ありとは思惟す可らす此故に唯だ〳〵抽象的に寫象して之を一個の精神と謂はざる可らず然れども吾人の經驗によれば精神は只だ〳〵形体に附して存するのみ形体を離れて獨り精神のみ存在すべきことは何によりて證明す可きか何等の證明もなくして單に假定するが如きは其人の想像に過ぎず素より眞理と云ふ可きも

のに非らざるなり

第二　凡そ世界の現象は悉く因果律に規定せられ一も原因結果の關係を免るゝこと能はず是を以て世界の中には妖怪なきなり人を以て妖怪とすることはあらん然れども之れ必らず何等か物理的の解釋ある可きものなり一切の科學は實に因果律を基礎として成立せるものにて寸毫も之れが一般性を無効ならしむるものあらば吾人の世界觀は忽ち其確實性を失はざるを得ざるなり然るに人格的の實在は其意志によりて人事を左右し物理的進行以外に又思慮外の原因をなすものなり故に今日の科學的思想と相容るゝ能はざるなり

第三　人格的の實在が個体を成す以上は其位置なかる可らず乃ち問はん此の如き實在は世界の如何なる處にかある世界の內か將た世界の外か兎に角世界と同一体ならざるが故に其位置なかる可らず精神は空間性を超絶するとするも人の精神は人の頭腦中に在り此の如く人以外の精神も其居る所の場所なきを得ず然れども之れ到底確定し得べき所にあらざるなり

人格的の實在は現今諸宗教の契合點なるも此の如き困難あるが故に最早維持

すること能はず假令如何樣に辨護するも今日の科學と之を調和せんこと毫も希望なしと謂ふ可きなり事情已に此の如くなる以上は今の諸宗教が尙ほ多少の生命を有するもの其實在の人格的なるにあらずして他に之れが効驗性を支撐するものなかる可らざるなり

憐む可し人格的實在の觀念は茲に至て遂に全く匕を投ずるの已むを得ざるに至り談は遂に萬有的の實在の觀念の評價に進めり其說に曰はく

然らば萬有的の實在は如何婆羅門教佛教儒教にありては今に至りて萬有的實在を說け共基督教にありては萬有的實在を說くことは其本來の目的に非らず故に基督教の價値は毫も茲にあらざるを斷言することを得べし又婆羅門教、佛教、及儒教に說く所の萬有的實在の觀念は哲學史上甚だ有趣的の事實なれども其宗教として効力ある所以のものは蓋し此にあらざるなり萬有的實在を說くときは必なす廣き經驗世界に就きて百般の證明を擧げ其此の如き本体あることを推論せざる可らず此の如くなれば寧ろ是れ哲學にして宗教の本領にあらず固より萬有的實在の觀念は頗る宗教の敎義を支撐するの力ある可きも是れ

決して宗教に必須なるものにあらず故に基督教と猶太教とは之なくして宗教たるを得るなり之を要するに今の諸宗教が尚ほ多少の生命の有するもの亦其萬有的實在の觀念にありと見做すを得ざるなり而して契合點の此にあらざるは基督教と猶太教とか例外たるを以て知るべきなり

以上說く所に依て見れば氏は宗教の實在的觀念の人格的なるは不合理なり左りとて萬有的――宇宙神教的ならんには寧ろ哲學に於ける領土任務に讓る可きものにしてり宗教の宗教たる範圍の外に超絶するものとせられたり此れ氏の立脚地より見る時は強ち無理なる論法にあらず何となれば氏は實行の點に着目されたる可ければなり然りと雖之を宗教全體の上より見るときは卿か狹隘に失せるやの感なき能はざるなり抑も宗教の宗教たる所以のものは或る理想を畫き此理想を信念して始めて人類の安心立命を托せんとするにありて隨て此の如き理想は勿論經驗世界と云はず有らゆる宇宙觀人生觀を貫きて普遍的に將た抽象的に或は演繹せられ或は總合せられたる論理的推究の結果に依りて初めて得らるべきものなればなり此點に關しては絶對的の意味に於て佛教に

之あれども基督教には之を認識する能はずとの推論は稍允當を欠くやの嫌を免れざるべし然れ共も假令萬有的實在の觀念を以て宗教の範圍以外に投棄したるを否定するとするも將來の宗教が發達する上に於ては至重なる部分最高なる價値の存する而かも尤も直接なる關係を有する宗教の性質としては萬有的實在の觀念を第二位に置くは予も亦た之を贊す而して其理由とする所必らずしも氏の如くならず後章論ずる所あるべし此の如く萬有的實在の觀念も已に不可ならば結局將來の宗教發達に就て最も大切なるものは如何なる實在の觀念なるか此觀念は各宗教悉く之を共有せるや否や若し之れを共有したらんには各宗教は果して此點に於て融和投合して遂に一丸となり得べきや否や之れ頗る疑惑の存する所にして又た實に興味ある問題なり試みに氏の說く所を見んに

吾人はこれより倫理的の實在に就いて考察ずる所あらん(一)婆羅門教にありては梵天と個人とは離る可らざる相互の關係を有せり曾に相互の關係を有すと云ふのみならず其實彼れも此れも一體にして區別なきものなり梵天は此世界の實在なり然るに梵天は我が身に在り若し迷妄を打破して我を顧みれば我稍

神は即ち梵天なり是故に我精神を指して「是れ即ち汝なり」又た「我れ即ち汝なり」といへり此の如く己れが精神の梵天たることを認識して之れと合一するを解脱と稱す是故に人の迷悟は唯だ此内にある梵天を認識すると然らざるとにあり要するに婆羅門教は實在を内容的(Immanent)に把捉し人生一切の事は之れによりて左右す可きものとせり此點より之を云へは之れを倫理的實在と稱するも不可なかる可きなり(二)佛教にありては如來は抽象的に之を云へは眞如實相にして世界の實在なれども又た各自の精神に在り千人あれは千の如來あり萬人あれは萬の如來あり猶ほ一痕の月の萬水に映するが如し其人各佛性ありとするもの此れに外ならず歷史的の如來は已に過ぎ去れり哲理的の如來には去來今なし今茲に各自の内に光を放ちて存するもの之を如來となす如來の外に求むるは俗人の所爲なり如來は我が方寸の内に認む可きもの是れ現象の方面より見來れば數多あるが如きも其實唯だ一なり所謂萬法一如之れなり個体主義を超絶して唯だ一体の如來あり是れ各自の内部に於て眞義として認むるものたり此の如き我内界に於ける如來は一切作法の樞紐なり此故に之を倫理的實在と稱するも何の不可か之あらん(三)基督教にありては實在を吾が方寸の中に在りとせり所謂「天國胸に在り」とは實在は外界に求む可らざるを意味するに非らずや四福音書の中にても特に約翰傳は内容的の趣旨を云へ表はすこと分明なり假へは其「我れ我父の中に在り而して爾我れに在り而して爾我れに在り」と云ふが如き實在と個人と相互に關係あるを指示せり神を外界に求むるも得べからず神は反りて我が方寸の中に在るなり彼の一念隱微の間に於て妙に是非するが如き感ある之を神の聲となすシュライルマッヘル、ロッツエ(Gewissen)を以て神とするもの其淵源する所なしとせざるなり基督教にありては倫理的行爲の基礎は我方寸の中に於ける神の聲にあるなり(四)儒教にありては天と人とは相互に密着不離の關係を有す天は人の父母にして人の心は即ち天に在るの天なり天と人とは大世界と小世界の如し故に「萬物皆備於我矣」と云へり天は人の倫理的模範なれども若し之を外に求むれば漠として法り難し若し之を内に求むれば燭々として我が方寸の中に在るなり彼の性と云ひ仁と云ひ誠と云ひ明徳と云ひ至善と云ふもの皆人に在るの天を意味するなり如何な

る人も己れが方寸の中に天を有せざるはなし苟くも之と合一せんと欲せば合一し得べからざるの時なし其「仁遠乎哉」と云へるは是れが爲なり苟も之と合一せば我が本体即ち天なり我が本体の天なることを知りて之れと合一することは是れ實に孔門傳授の心法にして儒教の倫理は是を基礎として立つものなり(五)神道にありても特殊の神は古代にありとするも信仰上より之を云へは是れ唯だ〳〵我が心の鏡に映寫して存するなり即ち我心の清淨にして汚點なき所是れ即ち神の宿る處なり其處に於ける敬なり誠なり仁なり是れ即ち其所の神なり「冥加以正直爲本」と云ひ「須照正直頂」と云ふも此事に外ならず俗に「正直の頭に神宿る」と云ふもの誠に當れり徳川時代に至りて吉川惟足、偏無爲等神道の神を内容的に説くことを試みたり特に偏無爲の如きは人天合一を説くこと差に精細なりと謂ふ可きなり此の如く對照し考察し來れば如何に今の諸宗教が差異點を有するも根底に於て一の契合點を有することと復た疑ふ可らず婆羅門教と云ひ佛教と云ひ基督教と云ひ儒教と云ひ皆人天合一を期するものにて彼等が歴史的の宗教として尚ほ多少の生命を有するは實に此點に在るなり抑今の

諸宗教の價値は果して那邊に在るか其人格的實在を説くが如きは少しく哲學思想ある者の信ずる能はざる所なり又た其萬有的實在を説くが如きは多少の興味なきにあらざるも素と哲學者の研究に讓る可きことにて宗教の如くいつまでも一定の世界觀を持續するは反りて智識の進歩を障碍するの弊なしとせざるなり唯、其人天合一を説いて倫理の根底を我方寸の中に立つるが如きは其れをして其効あらしむる所以なり抑諸宗教の價値は其世道人心を裨補するの一點にあるなり然るに諸宗教は實に世道人心を裨補し得べき根底を有するものなり但梵天と云ひ如來と云ひ「ゴッド」と云ひ天と云ふもの其之を寫象するの方法は必らずしも一樣ならず然れども其此の如き觀念を生ずる所以のものに至りては亦た何等の差違を見ざるなり

最後の斷案は遂に下されたり流石紛々擾々たりし宗教の前途に關する疑問も遂に氏が説明に依りて倫理的實在の觀念を以て相互の契合點と定め茲に歴史的怨讐の情を捨て、佛耶の調和儒神の融化を見ることを得ば吾人の喜び何者か此れに若かんや而して氏は尚ほ此内容的説明を捉へて之を倫理の方面にも推論して

第三章　井上村上兩氏の所説に就きて

村上博士の所論

曰はく「我は未だ我たる可らず彼我の一化せる大我こそ眞の自我たる價値を有するものなり畜來の倫理説は個々別々離散的の我のみを自覺せしめて吾人の所謂自我の目我たる深遠の理を自得せしめざりしが故に或は小我獨在の時不善を爲し暗夜人無き時不正を行ふの憂ありしなり」と刺すが如く抉ぐるが如く一々道義の腐敗を叩き時弊の戒む可きを追跡せり知らす氏の理想は果して現實たらしめ得るや否や茲に於てか予は姑らく村上博士の所論に見て心徐かに吾國將來の宗教問題を料理し以て帝國民の思潮を導かんことを期す

村上氏の「未來廿世紀間に於ける宗教觀」と題せる論文は全文此れを拾節に分ち頗る詳密に未來百年間に於ける吾國宗教思想の變遷を卜へたるものなり今其各節の眼目を擧くれば(一)緒言(二)未來に於ける宗教の盛衰(三)未來の宗教は果して合同すべきか(四)未來に於ける佛耶兩教の勝敗如何(五)未來世に歡迎せらるゝものは依然畜佛教なるか(六)未來世に歡迎せらるゝものは如何なる佛教なるか(七)畜佛教各派は果して二九となり得べきか(八)合同的新佛教の立脚地は理想的なるか又人格的なるか(九)未來に興るべき新佛教は何故に世間的倫理的なる可きか(十)結論等にして今其此等各節に就きて一々此れを吟味するは其要なしとなすも茲に最も注意を要すべきは將來に於ける諸宗教相互の關係及び新宗教の性質に關して如何なる意見を有せらるゝかを査察することと是なり而して此の要求を滿足せんが爲めには氏が論説中其第三節未來の宗教は果して合同すべき乎及び第八節合同的新宗教の立脚地の理想的なるか又人格的なる乎と云へる二節を吟味し尚ほ何が故に此處に至るべきかを知らんが爲には第九節即ち未來に興るべき新佛教は何故に世間的倫理的なる可き乎と云へるに就きて氏が所論を聞かば殆ど氏が宗教觀を玩味し得て兼ねて各宗教相互の關係及新宗教の性質如何を知悉せんと欲する吾人の知的要求に滿足を與ふるを得ん然り而して嚮きに已に述べたるが如く井上博士は佛耶儒神の四教に通有せる倫理的實在の觀念を捉へて將來四教は遂に此點に於て契合するものなることを斷言せられたるに對し村上氏は實に第三節に於て卿か反對の口調を以て遂に右四教の契合は到底希望し能はざるものなりとの推論を下せり今其所論を見るに曰はく

「余輩は未來廿世紀と云ふ長日月を待たざるも早晩新宗教の發生を見るに至る

所論の衝突

べしと云ふことを思はざるに非らず現今の諸宗教が此儘にて未來いつくまでも盛觀を呈すべしと夢想する者に非らず吾國新宗教發生の機運は今や已に切迫せるを思はざるに非らず然れども又た井上博士の如く佛教も耶蘇教も儒教も神道も皆其契合點あり此契合點を執へ來りて釋迦基督と云ふ如き歴史的特殊性の宗教を打破し去りて唯一普遍的の宗教が之に代はりて興るべしと云ふことは容易に豫想し得ざる者なり多年經過の後はいざ知らず今より數千年の間に此事あるべしとは到底豫想し能はざるなり

之に依て之を見れば氏は井上氏の契合論を以て絶對的に無謀なるものなりとは明言せざるも稍夢想視したるは蔽ふ可らざるが如し如何となれば氏は契合論を以て殆ど實際を離れて幾千年の後に於ては或は契合するとありとするとも先づ僅々百年間の宗教舞臺に於ては決して見るよと能はざるものなりとなしたればなり語を換へて之を言へば理想空想としては僅かに四教の契合一化を許すも合理的實際的希望としては到底之を否定したればなり而して氏は非契合の理由なりとして左の理由を掲げり

(一)宗教の性質は守舊的のものなり　故に新宗教の勃興するあるも容易に舊宗教は廢滅すべきものに非らず例せば過去數千年の古は印度に佛教興るも佛教以前の婆羅門教は今尚ほ持續するに非らずや泰西の耶蘇教に新教の分裂あるも舊教は今尚ほ依然として一方に勢力を占むるに非らずや我國平安朝の初めに當り傳教弘法の新佛教興り鎌倉時代の初めに當り榮西道元法然親鸞日蓮の新佛教起りしも奈良朝時代の舊佛教今尚ほ其後を留むるに非らずや之に由て此れを思ふに新宗教の興りて舊宗教に交代すべしと云ふ事は容易に信ずる能はず假へ交代することあるもそは最多數の歳月を經過せし後に非らざれば恐らくはその結果を見ること難からん

(二)宗教の性質は感情的のものなり　故に理屈よりも寧ろ其人格に重きを置くことは古今變はることなし未來と雖も又た恐らくは然らん故に釋迦孔子基督よりも一段優れる程の空前の偉人出づることありと假定するに非らざれば新宗教發明者の言を聞き舊説を捨てゝ新説を信用すべしとは思はれざるなり而して釋迦も三舎を避け基督も甲を脱ぐと云ふが如き豪傑偉人の出つることあ

るべしと信ずること難きが故井上博士の説の如き合一的新宗教が歴史的特殊性を有する習宗教に代はりて興るべしと豫想する能はざるなり

(三)宗教は歴史的性質のものなり　故に全く舊慣を脱却する能はず多少古へに徴し古きに倣ふ傾なくんばある可らずよし佛教儒教基督教回々教神道何れも契合點あるとするも已に井上博士も之を説き姉崎學士も最も盡粋攻究せらるゝが諸宗教は孰れも皆な幾千歳の永き日月を經て歴史的に漸く開發し來るものなり釋迦孔子基督と雖も其國の歴史より來れる宗教の改造者なることは贅言を俟たざることなり然れば興らんとする新宗教は各宗教の舊慣を全く脱却して興ること恐らくは難からん果して舊慣を全然脱却する能はざるものとすれば余輩は佛教の舊慣を持續して起るか又た基督教の舊慣を持續して起るか二者其一を取りて起るならん佛教各宗派の合一論の如きは左程難きにあらざる可きも佛教と基督教の合同論の如きは歴史上に於て又た舊慣持續上に就て恐らくは難からん現今の教理如何に契合點ありとするも根本的宗教の發足點に於て二者相違あることは明々白々たり即ち基督教は端を人事に發し人格的神を以て宗教の立脚地となす佛教は源を理想に汲み理想的涅槃を以て開教の立脚地となす根本的發足地に於て已に此相違あるものを合同一丸となすことは歴史的性質のものたる宗教の組織に於て最も困難たるべきなり恐らくは望む可らざることならん

之に由て之れを見れば折角井上氏が各宗教の契合點を探索して而して此契合點の上に新宗教を建設せんとの望みは今は全く絶え果つるの已むを得ざるに至りたるが如し知らず四教合同論の成行は遂に如何に其局を結び將來の宗教界に於ける優劣強弱の相撲は終に能く孰に扇を擧ぐ可きかを想ふに目下亂脈滅裂なる吾が國宗教界の潮流に掉して心徐かに各種宗教の相闘を眺め以て其勝敗を窺はんとするは實に興味あることなれ共如何せん予が敢て本書を草する所以のものは徒らに空文を弄して一場の遊戯を試みんとするには非らず實際上吾國民思想の動亂を鎮め國民をして忠實に宗教問題倫理問題を研究するの念を起さしめ大道坦然の域に導かんとするに外ならざれば以上二氏の論ずるが如く敢て將來吾國に於て孰れの宗教が果して覇迎せられ孰れの宗教が果して全盛の花を咲かす

べき乎の問題の如きは素より深く予の研究せんと欲する所に非らざれば假令此點に關し予は予の自信多少之れあるとするも姑らく此れを度外となし隨て此問題に就きては兩氏の所論の孰れを以て正となし不正となすべきかは世人の所見に一任し更らに進で未來に於ける新宗教の性質如何と云へる研究に遷らん而して此れに就きて村上氏の說く所を考ふるに氏は已に述べたるが如く先づ立論の前提として宗教の性質は守舊的、――感情的、――歷史的なるか故に四教の契合は全然之を否定すべきものとなし同一の根據より發して遂ひに佛教各派の一丸論を提示し未來に來る可き新宗教は現今の佛教各派の合同一丸より成れる新佛教なりと斷じ次ぎに此の新佛教の性質が如何にあるべきやを推論して先づ新佛教の立脚地は理想的なるか將た人格的なる乎を究明せり其說に曰はく〳〵

此の未來二十世紀の間に於ては必らず必らず新佛教の生出あるべしと豫想するに其新佛教の立脚地の想理的なるべき乎將た人格的なる可き乎と云ふことは頗る大疑問なり未來に新佛教の生出ありとすれば即ち其唱導者なかる可らず自ら唱導者の責任を負ひ新佛教を興さんとするに當りて最も苦慮す可きも

のは恐らくは此點にあらんか

近來世の論客口を揃ひて曰はく天外に猶一眞神の存在するなりと說き或は西方淨土に彌陀佛の存在するありと說くが如き人格的救主の存在說は古代嬰兒の泣きを止むる一時の手段なりしのみ方便なりしのみ科學發達の現在人の決して信ず可きものにあらずと或は然らん左れど宗教は感化にあり而して感化力は理想にあらずして人格にあるを如何せん泰西の宗教が多年間の感化力を繼續し來るも人格的眞神を其立脚地とするに由るものならん凡そ死物は宗教成立の根底とならざるなり大活物を根底とするものにあらざれば宗教としてて社會人心を感化すること能はざるなり今少しく佛教の教理史及教會史を研究してオヨ〳〵此事の眞なるを信ず

抑釋迦入佛より今日に至る二千幾百歲の佛教の中心點即ち根本的大原理は如何なる方針を取り開展せしか此事や不容易の大問題なれば今玆に陳述すべき限りにはあらざれども其の大方を一言せんに樹木は年を經るに隨て發達す發達に隨ひて枝條を增加するが如く根本原理に對する解釋は異論に異論を重ね

分裂に分裂を加へて實に複雜究まれる佛教となれり蓋し根本原理の開展と謂はざるべからず而して其開展は如何なる點より發し如何なる點に向ひ來りしかと考ふるに根本原理の說明は一段開展すれば一段だけ活物となり二段發達すれば二段だけ活物と成ると云ふが如くに、始終同一方針を取り活物方面に向ひて發達し來るを見る語を換へて曰はゝ根本原理の漸く開展し發達せし結果は理想的立脚地をなしてゐるに至りぬ嚮く專門語を應用して此事を陳述するに姉崎學士は佛教の中心點を佛法僧の三寶の中にて佛なりと云はれしも余輩は若し三寶に就て曰はゝ第二の法是れ佛教の中心點なりと言はんとす然れども法は抽象的普通名詞の故に法なる語を以て佛教の中心點を論ぜんとするも亦不當なり故に余は涅槃の語を以て佛教の中心點なりとす此中心點は佛教の根本的原理にして又最終理想なり然るに此最終理想たる根本原理にして中心的涅槃其ものを說いて或は眞如と稱し或は一心と稱し或は佛性と稱し或は如來藏と稱し更らに轉じて大毗盧遮那如來の光明界なりと說き及壽命無量光明無量の阿彌陀佛と謂ふに至る斯の如き見解は守舊的專門學者の一見大驚する所なるべきも理想開展の系統を攻究すれば實に斯の如しと言はずんばある可らず請ふ保守主義の專門家も大活眼を開きて教理の系統を討ねよ左れば余輩の見解も亦た敢て否す可きにあらざるを見ん

更らに眼光を轉じて教會史の方面に就き人心感化の勢力は理想的立脚の宗派にありしか又人格的立脚の宗派にありしかを尋ぬるに人格的立脚の宗派なりき支那に於て淨土教が初より終りまで盛んに行はれし事跡を以て見るも唐の中世に至り密教新來して朝野の信仰を惹き起すことの甚しかりしを以て見るも又我國平安朝の佛教は實に密教を以て信仰を繫ぎし事跡を以て見るも鎌倉時代となれば淨土宗、眞宗の如き大に起りし事跡を以て見るも公衆信仰を堅くして人心感化の効大なるものは根本原理を人格視する宗派にてありき即ち密教、淨土、眞宗、日蓮の如きは皆一の根本原理を人格視するものなり

此の如く教理史の發達及教會史の盛衰に徵し未來二十世紀間に起るべき新佛教を今より推測するに矢張り人格的立脚のものたらずんばある可らず蓋し人格にも人格あり宇宙以外萬有以外に個躰的人格を占むるが如きは到底未來世

に成立す可きにあらず左れば如何なる人格を以て起る可きか曰はく他にあらず次前に教理史の開展として一言せしものを縦に詠めて之を一段々々に切りはなすことを止め前後數級の説を縮め来りて一段の説として見よ如何なる人格を生ずる乎實に平等と差別と平等との關係の如く絶對的理想と人格的佛陀、人格的佛陀と理想的人格の一致を見るに至らん斯の如き人格を根本的立脚となすものに非らざれば宗教の資格を以て人心を感化することは恐らくは難からん而して此の如き人格的佛陀を以て立脚地となすに於ては全聖先きに佛教各派の精髄を執へて一丸となさずんばある可らずと云ひしものと自家撞着せざるのみならず此に於て一丸と成り得べきものと信ずるなり

以上説く所に依りて察するに氏は未来新佛教の宗教的性質は飽まで人格的立脚地を有するものたらざる可らざるを結論せり而して氏は推論思索の形式としては先づ教理史に訴へて佛・法・僧三寶の中に就きて立脚の中心點は佛に非らず僧に非らず曰はく法なりと断定し更らに法は抽象的普通名詞なれば教理の客観的崇拝物となすも効力なしとて遂ひに轉じて涅槃を執へ是れより漸次發展して差別的

――造作的人格即ち佛陀の存在を是認し次段に於ては教會史の方面より順進して古來宗教の發達に隨ひて理想的立脚地より出發して漸次に人格的立脚地に推移せることを主張せり然り氏は推論の結果として新佛教の立脚地は人格的なるべきことを絶叫せり氏は實に宗教本來の性質としては是非共之れが立脚地を人格的方面に置かざる可らざるを連呼せり按ずるに井上博士の宗教の立脚地は重きを倫理的方面に置き人格的方面を以て立脚の地位となすが如きは實に野蛮の宗教にして科學的進歩とは到底背馳するを免れざるを主張せらるゝを聞き而して今又た村上氏の人格論を主張せらるゝに會す吾人は茲に幾多の疑問なきを得ず乞ふ是より予は尚ほ村上氏が所謂人格なるものは其性質果して如何なるものなるかを見んが爲めに聊か氏が未来に興る可き新佛教は何故に世間的倫理的ならざる可らざるか、と云へる意見を聽かん曰はく

宗教と倫理とは必らず同一視す可きものにあらず倫理は社交的關係を重もとなし而して宗教は個人主義のものなり且つ夫れ宗教の本色は世間的のものなり然れども他の一方より考察すれば宗教亦た世間的のものなり社交的關係を

有するものなりと云はざるを得ず何故なれば宗教は慈悲を根本主義となし濟世利民を事となすものなるが故なり濟世利民の業をなすに就きては世間を離るる可らず社交的關係を斷絶す可らず世間を離れ社會を斷ちて濟世利民せんとするは實に不可能の業なりとす之に由て古來の宗教家の事蹟を見るも身を俗界に處し濟世利民の術を演じ人倫道德の法を敎へしもの史乘枚擧に遑あらざるなり

但し佛敎は厭世に僻する傾きあるは事實なり先聖の行跡に徵するも經典の文字に徵するも此は事實なりと謂はずんばある可らず然れとも余聖佛敎總部の大原則を攻究するに其性質決して厭世主義のものに非らざるを見る凡そ印度古代の宗敎を見るも西洋現時の宗敎を見るも宗敎最終の目的は此世界を不完全のものとして此世界を厭離するにあらさるものは實に稀なり此世界と關係を絶つに至りし所は即ち宗敎の目的を達し得たる所なりとす然るに佛敎は一方に厭離を講じつゝ他の一方には交際を講じつゝあるものにして此世界と關係を絶つに至りし所を最終の目的と爲すものにあらず一方の厭世的なるにも拘らず他の一方に樂世的意味を有するものは佛敎なり古來　從假入空從空出假の格言あり　向上向下の格言あり　性相還相の格言あるものは即ち此二大原則を示すに在り佛敎の原則果して此にありとすれば未來廿世紀に生出すべき新佛敎は此原則を執りて成るべく世間的に組織し成るべく倫理的に布敎の方術を講ず可きは實に見易き理數なりとす

抑々佛敎が非常なる厭世主義を執るが如く見ゆるは二千年以前に於ける印度の小乘佛敎の餘習なり中古開展の大乘佛敎の性質は決して然るものにあらず左れば今後廿世紀間に生出すべき新佛敎が過去世紀以前の舊套を冠りて出づべしとは誰れも豫想し得ざる所ならん故に余輩未來廿世紀に生出すべき新佛敎は世間的倫理的のものたることを確信して疑はざるなり

氏は此の如くして終に國家政治の改革の後には必らず宗敎の革進を見るものなりとの推論豫測を以て全文の大團結となしぬ此れに依て此れを見るに氏の所謂宗敎の人格的立脚地とは即ち宗敎の客觀的崇拜物の義にして而して其性質は絕對的に世間的——倫理的たらざる可らざるものとなしたるや明らかなり茲に於

で井上氏の所説と互に相照合すれば彼れと此とは其説明の方面を異にし其文字を異にしたるまでにして共に倶に宗教の實在的觀念を以て將來殆ど必至的に世間的倫理的にして社會の活動を助け人文の進歩發達を益し國運を增長せしむる上に於て價値あるものたらざるを斷言せる點に於ては全然相一致せられたるものと謂う可し

之を要するに兩博士の主張せらるゝ所自ら特色ありて全然均等のものなりとは謂ふ能はず井上氏は宗教的實在の觀念につき三種の分類を示し所謂人格的實在若くは萬有的實在の觀念の如きは科學の進歩と相容れざるものとなし偏り彼が倫理的なるに至りて初めて價値あるものゝ如く村上氏は其趣意とする所は宮に人の想像上に浮びたるものを以て宗教の基礎を建つるものに非らず必らず或る歴史上より偉人に依て現はれたるものに非らざれば將來の宗教として勢力を有する者にあらずと論じ結局佛教各派の合同を以に將來の新宗教なりと決したれば二氏の所論之に於てか稍其趣きを異にせられたるが如し雖も然れ共井上氏の實在の觀念は倫理的なるべしと叫び村上氏は人格的立脚地は世

間的なるべしと呼びたるを以て見れば此點に於ては兩雄の所見自ら相投合せるものと謂つ可し此の如きは蓋し兩博士が多年の經驗と研鑽とに依りて自得せられたる思想に相違あらざるも焉ぞ世界の思想潮流の大勢が宜しく宗教は出世間的教權的より脫して漸く人文的社會的方面に傾く可きものなることを告げたるに非らざるを保せんや吾國宗教問題の將來も亦卿かに下すべきに似たり而して予は後章大に論ずる所あらんとす

第四章　福澤翁の修身要領に就て

修身要領布教の由來、要領の全文、世論雜色、論難と世界の大勢、

井上村上兩氏の宗教倫理問題に關する意見は前章に於て讀者に之を紹介せり此等兩氏に續いで近者世人の注意を惹起したるは福澤翁が修身要領となす翁は敢て世に所謂哲學者にあらず又た科學者にも非らず偶ゝ時世に感ありと稱して修身要領を發表するや意外にも世論の囂々を招ねきし所以のものは抑ゝ翁が修身要領が滿綠裏中紅一點のものなりしが爲めなるか將た他に之が原因ありて然る

要領の全文

か想ふに如何に翁が時世に感ずる所ありたればとて全然自ら發明し自ら創始して要領を編みたるものにはあらで只舊來の脩身處世の道に於て稍欠けたるを補はんが爲めに世人の左程重大視せざりし舊來の一德を捉へて之に力を用ひ之に念を入れて實行せんことを紹介せられたるまでの事ならん然るに敢て世人の之に對して囂々せし所以のものは他なし翁が要領を以て科學的根據あるものと認めたるか或は絶對的に實行を強ふるものなるかの如く解したるに依れるなるべし予を以て之を見れば翁が要領起草の趣旨とする所は敢て必らずしも科學的原則の有無に拘泥するにもあらざれば絶對的に極端にまで此れが實行を強請せんとには非らずして惟〻從來吾國民の道德的意識が服從の一方に偏重し進取の氣なく敢進の勇なくかくては生存競爭の烈しき國際場裏に立ちて其名譽を保全せんこと誠に覺束なかるべしとの趣意より聊か自己の經驗に訴へて心付きし節々を記錄し門下の諸子が箴諭となさしめんとしたるものなるが如し今要領の廿九ヶ條を見るに曰はく

●脩身要領●

凡そ日本國に生々する臣民は男女老少を問はず萬世一系の帝室を奉戴して其恩德を仰がざるものある可らず此一事は滿天下何人も疑を容れざる所なり而して今日の男女が今日の社會に處する道を如何すべきやと云ふに古來道德の敎一にして足らずと雖も德敎は人文の進步と共に變化するの約束にして日新文明の社會には自ら其社會に適するの敎なきを得ず即ち脩身處世の法を新にする必要ある所以なり

●一、人は人たるの品位を進め智德を研きます〳〵其光輝を發揚するを以て本分となさゞる可らず吾黨の男女は獨立自尊の主義を以て脩身處世の要領となし之を服膺して人たるの本分を全ふす可きものなり

●二、心身の獨立を全ふし自ら其身を尊重して人たるの品位を辱しめざるもの之を獨立自尊の人と云ふ

●三、自ら勞して自ら食ふは人生獨立の本源なり獨立自尊の人は自勞自活たらざる可らず

●四、身躰を大切にし健康を保つは人間生々の道に缺く可らざるの要務なり常

に心身を快活にして苟めにも健康を害するの不養生を戒む可し

五、天壽を全ふするは人の本分を盡すものなり原因事情の如何を問はず自ら生命を害するは獨立自尊の旨に反する背理卑法の行爲にして最も賤しむ可き所なり

六、敢爲活發堅忍不屈の精神を以てするに非らざれば獨立自尊の主義を實にするを得ず人は進取確守の勇氣を缺く可らず

七、獨立自尊の人は一身の身躰方向を他に倚賴せずして自ら思慮判斷するの智力を具へざる可らず

八、男尊女卑は野蠻の陋習なり文明の男女は同等同位互に相敬愛して各その獨立自尊を全からしむ可し

九、結婚は人生の重大事なれば配偶の擇は最も愼重ならざる可らず一夫一婦終身同室相敬愛して互に獨立自尊を犯さゝるは人倫の初めなり

十、一夫一婦の間に生るゝ子女は其父母の他に父母なく其子女の他に子女なし親子の愛は眞純の親愛にして之を傷けざるは一家幸福の基なり

十一、子女も亦た獨立自尊の人なれども其幼時に在りては父母は之れが教養の責に任せざる可らず子女たるものは父母の訓誨に從て孜々勉勵成長の後獨立自尊の男女として世に立つの素養をなすべきものなり

十二、獨立自尊の人たるを期するには男女共に成人の後にも自から學問を勉め知識を開發し德性を脩養するの心掛を怠る可らず

十三、一家より數家次第に相集まりて社會の組織をなす健全なる社會の基は一人一家の獨立自尊に在りと知るべし

十四、社會共存の道は人々自ら權利を讓り幸福を尊重して苟くも之を犯すことなく以て自他の獨立自尊を傷けざるに在り

十五、怨を搆へ仇を報するは野蠻の陋習にして卑劣の行爲なり恥辱を雪ぎ名譽を全ふするには須らく公明の手段を擇ぶ可し

十六、人は自ら從事する所の業務に忠實ならざる可らず其大小輕重に論なく苟くも責任を怠るものは獨立自尊の人に非らざるなり

十七、人に交はるには信を以てすべし己れ人を信じて人も亦た己れを信ず人々相信じて始めて自他の獨立自尊を實にするを得べし

十八、禮儀作法は敬愛の意を表する人間交際上の要具なれば苟めにも之を忽にす可らず只だその過不及なきを要するのみ

十九、己れを愛するの情を擴めて他人に及ぼし其疾苦を輕減し其福利を增進するに勉むるは博愛の行爲にして人間の美德なり

二十、博愛の情は同類の人間に對するに止まる可らず禽獸を虐待し又は無益の殺生をなすが如きは人の戒む可き所なり

二十一、文藝の嗜は人の品性を高くし精神を娛ましめ之を大にすれは社會の平和を助け人生の幸福を增すものなれは亦た之れ人間要務の一なりと知るべし

二十二、國あれは必らず政府あり政府は政令を行ひ軍備を設け一國の男女を保護して其身体生命財産名譽自由を侵害せしめざるを任務となす是れを以て國民は軍事に服し國費を負擔するの義務あり

二十三、軍事に服し國費を負擔すれは國の立法に參與し國費の用途を監督するは國民の權利にして又その義務なり

二十四、日本國民は男女を問はず國の獨立自尊を維持ずるが爲めには生命財産を賭して敵國と戰ふの義務あるを忘る可らず

二十五、國法を遵奉するは國民たるもの〻義務なり單に之を遵奉するに止まらず進んで其實行を幇助し社會の秩序安寧を維持するの義務あるものとす

二十六、地球上立國の數少からずして各其宗教言語習慣を殊にすと雖も其國人は均しく是れ同類の人間なれば之に交はるには苟くも輕重厚薄の別ある可らず獨り自ら尊大にして他國人を蔑視するは獨立自尊の旨に反するものなり

二十七、吾々今代の人民は先代前人より繼承したる社會の文明福利を增進して之を子孫後世に傳ふるの義務を盡さゝる可らず

二十八、人の世に生るゝや智愚強弱の差なきを得ず智強の數を增し愚弱の數を減ずるは教育の力に在り教育は卽ち人に獨立自尊の道を教へて之を躬行實踐するの工風を啓くものなり

二十九、吾黨の男女は自ら此要領を服膺するのみならず廣く之を社會一般に及ぼし天下萬衆と共に相率ゐて最大幸福の域に進むを期するものなり

と是れ即ち翁が吾國の男女が現今の社會に處する道なりとて概括されたるものにして茲に掲げたるは其全文なり而して世人の論議する所は或は翁が序幕に於て道德の變遷を明示したるを非難し或は破格なる男女の同權を戒しむる等一々其細目にまで渉りて論議せる所の者素より多々なるべしと雖も中に就きて尤も有力にして又尤も科學的根據の比較的強き攻撃の矢は翁が獨立自尊を主義とせられたるを難ずるの點なり曰はく獨立自尊も亦た一德たるは吾人之を許す然れ共苟くも之を以て修身處世の主義となすは即ち不可なり何となれば獨立自尊は積極的權利擴張の意味にして只だ此の一方のみにては甚だ危險なるものなり此れと仝時に消極的恭儉の道即ち服從遵奉の教あるに依りて初めて兩々相中和して其宜しきに合すべきものなりと　又曰はく獨立自尊を主義とする修身法は必竟個人主義たるを免れず個人主義は獨立自尊の眞意義なり假令如何程辯舌を巧み文筆を弄して獨立自尊が決して個人主義にあらざるを主張し之が實行を鼓吹

せんと勉むる者あるとも开は率强附會の自造說に外ならざるなりと　然り然ら〳〵翁が修身要領の骨子を察するに全く其根據を個人主義に置き個人の爲めに家族を認め個人の爲めに社會國家を認め個人の幸福を謀り個人の滿足を得るを以て人間本然の義務となしたるは明了なる事實にして獨立自尊の個人主義たること亦疑なきものと信ず個人主義果して排すべきか個人主義却て貴ぶ可きに非らざるか予は後章大に論述する所あらんとす

然りと雖も予は是等の爭論に由りて端なく一の新なる現象を發見せり即ち已に前章に於て述べたるが如く世界の思想界に於ける大勢上より之を觀察するに今日の倫理上の問題は偖かに個人本位と團體本位との衝突に在り個人本位の論者の主張せらるゝ所は社會國家を以て個人の幸福を增進せしむる方便に過ぎずとなし個人無からんか何を以てか社會國家の存するあらんや個人は本にして團體は末なりと謂ふに在るものゝ如く團體本位論者の主旨となす所は團體と個人とは其起原の前後を爭へば即ち個人本位の論者の說く所に伏すと雖も已に社會的生活を營み國家的組織の成立せる後に於ては起原の前後を以て其本務を論議す

可ものに非ず假令之れを論議するも國家成立以後社會組織以後に於て生れたらん人類は明らかに其起原に於ても亦た團体社會を先きに致すべきや明らかなるが故に結局人間本來の任務としては飽迄でも團体の幸福を先きとなし個人の幸福を第二となすべし左れば或る場合に在りては個人の幸福を犧牲に供して社會國家の幸福を求むるも決して不當なるものに非らずと云ふにありて之れに國家主義の者と社會主義の者とありて多少の相違あるも大体の點に於ては其論ずる所素より相同じく旗幟堂々砲火を飛ばして個人本位論者と攻伐する樣晩近愈酣なるを覺ゆるに至れり殷鑑遠からず遡く吾國に於ても亦た此二派の潮流を見る福翁の要領は多少兩者の趣意を折衷したるが如き嫌ありと雖も大体の點に於ては個人本位に屬すべく之を非倫する者は即團体本位に屬すべし知らず二大思潮の衝突は遂に如何なる終局を結ぶ可きかを帝國將來の前途豈に憂なしとせんや

問題の起る所以。國家權力說。人は社會的動物なりとの見解より國家刑罰權に及ぶ可し。國家本位は個人本位と矛盾するものに非らず。

第五章　國家本位とは何そや

世に所謂國家本位とは如何なるものなるかと云へる疑問に就ては已に法律學者倫理學者將た哲學者等に依りて晩近噴々論せらるゝ所なれば今更之れを論ずるの要なきに似たりと雖も元來此種の疑問は其範圍の廣きのみならず此と連關して又た幾多の疑問をも起す可く而かも倫理及宗教問題とは密着不離の關係あるものなれば啻か倫理問題の解明の順序として少しく其性質を研究し討檢することは現今及將來の倫理問題に關し大に必要ある所なるを以て予の信ずる所を左に述べんとす

國家本位とは即ち個人本位と云へるに對せる語にして尚ほ人類の生を此世に受けたるものは自己の終生を通じて國家の生存及其發達を圖るを以て尤も主要なる任務なりと見做すのみならず或場合に於ては假令個人の幸福を犧牲に供し其の利益權利を擧げて之を國家に捧ぐることあるも唯一に國家の幸福を增進せしむるを以て最大眼目なりと見做すの謂に外ならざるが如し故に單に言ふときは國家本位なるものは個人本位の趣旨とは全然矛盾するものなるやの疑ありと雖

とも仔細に考ふれば國家本位の標準は必しも個人の利害と衝突する者にあらず寧ろ之れを保護するものなりと信ず只或る一二の場合に於て兩者の利益幸福が不幸にして衝突する時に於ては個人の利益幸福を棄て國家の利益幸福を重ずるの意に過ざる可し然り而して假令一二の場合なるにもせよ苟も兩者の利害幸福が互に衝突する場合に於ては何が故に個人を犧牲にして而して國家を犧牲にせざるか是れ古來大に議論のある所なり此れ盖し已むを得ざるに出づるものなるか將た「當然の義」なるか「犧牲にせざる可からざるの意」なるか「犧牲となすべし」との意なるか一方より之れを考ふるときは個人ありて初めて國家の生存し得るものなれば個人を措て國家の生存を認むる能はずと云ふものあり此論は暫く之を措き今茲に一ッの疑問を起さんとす即ち國家は如何なる理由に依りて個人を支配し又個人の利益を犧牲に供して迄も自已の權利を擴張することを得るものなるや尙ほ言ひ換ふれば國家の個人に於ける絶對的の權利は何に基て存するか論者或は言はん

國家の權利は即ち强者の權利にして國家は個人に比較して其權力强大なるが故に個人を支配し個人を制御し敢て之と衝突せざる限りは之れを保護することある可しと雖も否らざるに於ては忽ち之れを壓倒して毫も假借することなく飽迄自已の利益を要求して已まざる者なり而して其理由とする所は只だ權力の强盛なると勢力の偉大なるとに依るものとす其有樣尙ほ獅子が自已の要求の爲めに怯弱なる小動物を捉へて之を喰ふに異なることなし

と世人の多くは此論を以て實に至當なる者となし乃ち權利の說明上吾人の智的要求の滿足を得たりとなすものあらん此れ何たる謬見ぞや予は予の智的要求ありて自ら內に顧みす人々に向ては別に言ふ所なかる可きも予は予の智的要求を滿足せしむること能はず否な寧ろ此說を否定して已まざるものなり故に予は尙ほ進んで此他に國家の權力の基礎を求めんとす

熟ら考ふるに「人は社會的動物なり」とは已に古人の謂へる所なりと雖も其社會的動物なることは如何なる意味なるか如何に之れを解釋すへきものなるかは之れを解釋するもの、思想に依り多少意味の異なる所なきを保す可らざるも一言に

して之れを云へば人には同情(sympathy)及愛情(Love)なるものありて啻に他人と機械的に交際するを以て愉快を感するのみならず更に精神的交際を爲し他人の幸福を以て自己の幸福と思ひ他人の不幸を以て自己の不幸の如く思ひ喜怒愛樂一切之を己に推して考ふ所謂利害の共通なる所あるものなりとの意に外ならさるなり此れを以て下等動物間に於ける生存競爭と人類間に於ける生存競爭との間に大なる差違を生するものなり即ち下等の動物に在りては多くは單に機械的交際を營むに止まりて比較的に同情愛情少なきものなるが故に一朝利害を爭ふに於ては各自獨立に利害を解し少しも相憐相恕の念なく相搏ち相噛み假令他を害することあるも只管自己の利益を全ふし自己の欲望を滿足せんことを勉む其爭鬪や乾燥無味なるものにして殆と濕薪を束ぬるに類す人類に於ては大に之れと異なり社會的性質頗る著明に發達したるが故に散々伍々各自獨立の生存競爭をなすが如きは比較的少なくして必ず或る團體を組織し假令競爭軋轢することあるも一團体と他團体との間に競爭する場合比較的に多きものなりとす今假りに甲乙兩團体の生存競爭に就て例せんか團体間に在りては鐵火も交ふ可く劍戟も振ふべく突撞掠奪交々起るにもせよ甲乙各團体内に於て含蓄せられたる各自相互の關係は所謂利害の共通を存して各融合統一せる一体なれは各自相互の間には共に俱に救助掩護する場合こそあれ苟も相屠り相殺すが如き競爭なきものと謂はざる可からず換言すれば甲乙兩團体間に於て見ると同程度なる競爭は決して之れ無きものと謂はざる可からず然らば即ち人、相集まりて一團体をなし特に一層の進化をなして飜然國家組織に發達せるに於ては國家は圓滿なる個民の集合團体にして融合統一の最高目的に合したるものなり然らは即ち其國家中に存する個人間に於ては假へ或る小事に關し時としては多少の利害を異にする點より僅かに競爭をなすことあるも是れ甚だ稀有なることにして人生の大利害に關する點に於ては國民の數幾百萬の多きに昇るも尚くも統一して一國家を形造りたるに於ては理論上實際上皆其利害を共通ならしむるものたること明かなり

今假りに國家中に其秩序を亂し其安寧治安を妨げ國民一般に對して有害なる一個人ありとせんか國家は忽ち之れを捉へて之を懲し或は又或場合に於ては斷然之れを死刑に處するを躊躇せざるが如きは吾人の日常目睹する所にして交通繁

死刑廢すべし

劇の今日益々多きを加へたるが如し此に於て復た前の問題を繰り返し國家は如何なる理を以て之れを罪し之を罰し將た之れを死刑に處するの權能を有するかを確めんとす換言すれば國家の刑罰權は何等の理由によりて之を行ふものなるか此問題に答んとするには或は政治學上より或は法律學上より是れか解釋を與へ得べしと雖も予の解釋を求めんとする所以の者は彼れにあらず此れにあり倫理上國家は之を死刑に處するの權利權能を有するや否やにあるなり人或は言はん國家の秩序を亂し安寧治安を妨げ國家一般に有害なる者は之を國家中に生存せしむること能はず捉へて此れが生命を奪ふ素より當然の義務なりと事實果して然りとすれば國家は其一個人に對し單に有害なる故を以て之れを死刑に處することを得るとすれば其一個人も亦た國家を以て自分の爲めに甚だ有害無情なるものと見做して大に歎息するならん故に國家に於て其個人を以て有害なりと認むる理由は個人に於ても亦た之れある可く隨て國家が其個人を捉へて死刑に處せんとする場合に於て若し其一個人と國家が互に相對する程の權力を有せしならんには其處に於て恐らく個人は之れを兵力に訴へて迄でも國家と勝敗を決せんとするなる可し詮する所彼の有罪なると無罪なるとは道德上に於ては何等の理由なく勝敗の結果に隨て異なるが如き推論を見るに至らん豈に怪訝の至りならずや實際に於ては通常の一個人は大國家に對しては到底抵抗するの力なく實に一匹の昆虫が獅子に對して抵抗するが如くなるが故に國家が此れを有害なりと認め之を罪し之を罰するに於ては彼の一個人は歎息しながらも已むなく其刑に服するが故に他に何等の理由も無して單に權力强盛なるの一事を以て國家に刑罰權の存在を認めんとする一派の趣旨幸ひに實行せらるゝと雖も然れども之れ單に僥倖と言ふに止まりて素より或る程度までを限りとす即ち有害なりと認められたる一個人の權力が國家の權力に比して劣弱なる場合に於てのみ施行せらる可しと雖も更らに之れより一歩を進まば吾人は何に由て國家刑罰權の動かす可らざる所以の理を知らんや宮に然かのみならず若し國家の刑罰權は別に倫理上之れを附與するの理由なく徒らに國家の權力は强大なるが故に之れを籍りて有害なる個民を罰したりと謂ふに止まらば亂逆不平の徒或は一挨を起すの機會あれかしと願ふことあらん密かに其兵力を養ふて野心を成さん

とするもの有らん苟且にも國民の腦髓中に「罪の有無は必竟勢力の大小に依るものなり」との觀念僅かにても之れを有したらんには國家の前途頗る憂ふ可きものなり然かり今日の實際に於ては斯かる場合蓋し少なからざるべし斯く考へ來れば國家に有害なる者を罰するは權力の強大なるに依るものなりとの說は吾人之れを正當なるものと見做す能はず隨て權力說の所論の如き理由を以て罪人を罰するは吾人の屑しとなさゝる所なりさればとて只だ理論上已むを得ず國家に有害なるものを滅亡せしむるものなりとして已む可きか予は尙ほ他に國家の刑罰權を保有する所あるを信ず

罰きに論ずるが如く人には獨立性のもの少なく社會性の大に發達せしものありて衆人と共に樂むを以て最高等の樂とするものなり此の如きは獨り倫理學上衆人と樂む可きものなりと云ふに止まらず人々自然の性質に依り自ら進んで衆人と共に樂むを以て無上の樂なりと感ずるものなりと雖も總じて嗜好の厚薄は其人の個性に依りて異なるものなれば人の社會性に於ても彼れに厚く此に薄きの差違あるは勿論の義にして只だ或者に於ては其嗜好の能く發達せざるものあり

て其快の快なる所を解すると比較的少量なり偶ゝ國家に有害なる一個人の存在を見るが如きは社會性の嗜好稍薄く己れ獨り樂まんとするより來れる結果にして其狀恰も音樂は快なれとも其嗜好の發達せざるに均し此點より之を考ふるときは國家が個人の利害を犧牲にして國家の發達を益〻增進せんとするは決して之れ個人のものを取りて之れを他のものに與へんとする所以にあらず若し斯の如く解する者あらば誤謬の基なり必竟一時は其個人のものを犧牲に供するが如くに見ゆることあるべしと雖も結局國家の發達は其本人の爲となるものならざる可からず換言すれば國家が有害なる一個人に對して有する刑罰權は慘酷なる意にもあらず必竟するに國家の個人に對する慈悲心より出でたるものなり自ら手を下して彼れが社會性の嗜好の稍薄きを矯めて更らに同情愛情の趣味に富たる人となすが爲めに行ふ手段として刑罰權を有するなり國家の個人を支配するは恰も親の其の子を支配するに異なることなし親は其愛兒が或る食物を食はんとする要求に對し之れを拒むことあり

之れ決して小供の利害を犠牲にして自己に快樂を得んとするには非らず必竟眼前の快樂を抑ふるは將來其子の幸福を增進せしめんとの意に外ならざるなり此點より此れを考ふるときは彼の國家が罪人に對する關係も亦た之を知ることを得べし素より罪人中に於ても性惡なるもののあり又た國事犯の如きもののありて倫理上善惡の程度は勿論千差萬別なるべしと雖も試みに極端の例として今性惡なる罪人に就て之れを云はんに如何に性惡なる者なればとて其犯罪の性質に依りては倫理學上斷じて之を死刑に處するも可なりと云ふべきか彼の同情愛情の關係より將た刑罰權本來の性質より之れを考ふるも決して然らざるなり何となれば性惡なる犯罪者は多くは先天的遺傳に依るか或は後天的に敎育訓練の未だ完からざるに基づくものにして恰も性質薄弱なる身体を有するものと同じく假令完全なる形骸を備ふるも彼れは實に精神的不健全なる不具者なり不幸者なり大に憫む可きものなり然りと雖も之れに自由行動を許すに於ては眞民の安寧を害するが故に之を捕縛して自由行動を禁ずるは即ち善し然れども彼れは憫む可き者なるが故に之を導き之を誘ひ人力の及ぶ限り其改善を謀り一個の眞民たらしむることを勉むることこそ本意なれ之れを捕へて其首を刎ぬるが如きは到底之を許す能はず之れ即ち彼敎誨師なるものあり又感化院等の設ある所以なり論者或は言はん若し彼にして其性を改むることなしとせんか執へて之を死刑に處し以て眞民の安堵を求め千萬人の龜鑑となすの勝れるには若かざるに非らずやとさきにも既に述べたるが如く終身其自由行動を禁じて之れを獄に繫ぎ再び眞民に害を及さゝらんことを勉むるは善し假ひ犯罪の性質極めて害惡なるもののあればとて彼の生物なるものを執へて人爲的に之れを死刑に處するが如きは倫理上之れを許容す可き理由一もあることなし然かのみならず如何に頑固なる又如何に奸惡なるものと雖も猶ほ生命を保つに於ては復た改善の機會なきにしも非らず然るに一旦之れを死刑に處するに於ては何を以て恢復することを得んや囚徒改善の後往々偉功を奏したるは古往今來屢々見聞する所なり然るに事茲に出でず性惡なればとて敢て其生命を奪ふ誠に惜む可き事共なり之れを以て之れを見れば國事犯の如きは論を要せず假ひ罪惡なるものと雖も國家が刑罰權を有する所以の者は他なし一は以て眞民の被害を防ぎ一は以て其當人の改善せんことを希望

國家本位は個人本位と矛盾するものに非らず

するを以て目的とせざる可らず一言にして之れを云へば國家の個人に對する權力は個人の利益を犧牲にして國家の利益を擴張せんとするには非らず其各個人の利害の爲めに時としては一時其利益を抑壓し或は之れを捕縛することある可しと雖ども必竟其人の爲めに其人を罪するに止む可し此の如くにして始めて眞正に國家刑罰の眞目的に合したるものと謂ふ可きなり

知る可し國家本位なるものは一見個人の利害を措き國家を以て最も大切なるものと見做すが如しと雖も少しく留意して更に其國家の目的を分析し來れば結局個人の利害を措て別に國家の利害の存することなく必意個人の爲めに個人を支配するに外ならざるものなることを世間の國家本位の論を唱ふるものは多く只だ國家の一面のみを認めて未だ個人の一面を認めず誤謬の見地に立て個人に強ふるに絶對的の服從を以てせんとす豈嘆ず可きの至りならずや

第六章　個人本位とは何ぞや

問題の起る所以、國家方便說、經濟學上より論ず、倫理學上より論ず、カントノ學說、政治上より論ず、科學的虛無主義、國家約束說、兩本位說の調和

個人本位とは國家本意と同じく是れ又た世間通常使用する語にして故らに說明を要せざるが如しと雖ども而も倫理學及び社會學上に關係すること深く古來此れが解明を試みたるもの亦た鮮からず而して其解明の如きも或は解明者其人に依て其意味多少の差違ありて之を一括することと難しと雖ども其中に自ら共通一致したる所なきに非らず即ち彼等の多く唱道する所を見るに個人の利害を基礎と見做し假令ひ個人集まりて社會をなし合して團體を作り更らに進んで國家的組織となるも必竟是れ個人の利益を保護するの機械或は個人の利益を增進するの方便に過ぎすされば個人の利害を措て國家の利害なる者あるとなく個人の幸福を措いて他に國家の幸福社會の幸福等あるべきの理なく結局個人を以て終るものなりとの點に於ては各相一致せるが如し特にマンチエスタ派の經濟學に於ては人は徹頭徹尾自己の利害を目的とするものなりとの前提を以て經濟學を組織せんことを勉めたれども悶む可し希望は悉く實際と反し積年の勞苦は遂に空しく失敗の塵理に沒せられて獨り遺骸のみは尙ほ未だ今日に

問題の起る所以

國家方便說

經濟學上より論ず

殘れり然らば何が故に成功せざりしか倫理學上及び社會學上個人主義なるものは存在し得べきものなるや否や予は予の自信を述べて普ねく學者の參考に供し識者の判斷を求むる所あらんとす英國にては經濟上の經驗に關して面白き事實ありき即ち

英國にては彼の經濟學に於て有名なる需用供給の法則を正確なるものと見做し之を以て實業社會を律せんとしたることあり乃ち人の勞力を以て一つの商品と見做し勞働者の賃金は必竟勞力を買ふの價なりとして之に需用供給の法則を應用し勞働の供給と之を使用せんとする需用との割合により之に由て其賃金を定むる者なりとせり

此法則を嚴密に應用して資本家は其極端にまで勞働の賃金をニギリ勞働者は之れに抵抗して或る程度より以下は決して低減せざることとなせり然れども生活の狀態は兩者自ら同じからず兩軍相對峙すること未だ久しからざるに勞働者の一軍は早く已に日々の生活に窮するの悲境に陷りたるが故に遂には資本家の勝利となりて憫む可し一時は大に其賃金を下落せしめたることありき然る處如何なる結果を呈せしや勞働者は其賃金の少きが故に充分なる滋養物を食する能はず勞働數時間にして四肢痺へ五体弱り次第に身体に疲勞を來たし數年にして勞働者一般に其勞力衰へたれば之に依て結局其雇主は賃金の減少したると同時に其收入も亦た大に減少したるが故に雇主の勝利は即ち勝利なりと雖終には賃金を利するどころか却て精算上一毛を利して千百を失ふが如き愚を學ぶの已むを得ざるに至りて漸く其過失なりし所以の理を發見するに至れりと是に於て疑問起れり需用供給の法則は果して無限に買品の價格を支配するや否やのことと是れ也而して其研究の結果勞働者は自己の一身を充分に保全し又た三四人の家族をも養ひ得る丈けの賃金を得るに非らざれば勞働の力衰へ其結果又た雇主の損失なるが故に延て又た社會一般の損失たることを發見するに至れり之を以て之を見れば各自個人的利害の根本としたる法則は或る點までは行はる可しと雖も社會上或る一部分の個人の利害の爲めに他の者の利害を犧牲にするが如きは結局社會に取りては極めて有害なるものにして茲に至ては需用供給の法則の外に立て人生の要求は如何なる處に其標準を求む可きかの問題を解せざる可らざるな

り之れ已に一種の社會問題にして個人主義を以て徹頭徹尾經濟主義となす能はざる一例なりと雖も個人相集つて社會國家を作り相互に共同の生活を營むに於ては純然たる個人主義は到底行ふ可らざることにして知らず識らすの間に利害の共通なる所を有し共通利害を犯して自己の利益を求めんとするときは直接か又間接かに自己の利益を失ふに到るの理を知るに足らん次ざに倫理學上より之を論ぜんに約そ倫理的行爲の根本は之を何に求む可きかと云ふは已に古し隨て其說亦た甚だ多し或は之を神の意志に求めんとするあり或は之を人類の幸福に求めんとするあり或は之を自己內心中の良心に求めんとするものありて今一々之を說明せんとするには非らずと雖も獨逸の碩學カントの如きは之を自己の意志に求めんと試みたるものにして

倫理學上より論ず

カントノ學說

自己の意志には絕對的に無上の權力を有する一種の命令 (Categorical Imperatine) の聲あり善惡の標準は一に此の命令に從ふと否とにありとせり此說は倫理の根本を神に求めず或は又た人類一般の幸福にも求めず又た國家の利害にも求めず一個人の意志の命令に求めたるが故に倫理上の個人主義と見て可なるが如しと雖も尙ほ之を推して考究するときは是れ又た決して所謂個人主義には非らざるものなることを發見す何となれば前に既に述べたるがカントは自己の意志を以て無上の命令者と見做し其命令に隨ふは即ち意志の自由なりと見做したりと雖も之れと同時に自己に自己の意志の自由を有するが如く他人も亦各自意志の自由を有するものなりと見做したればなり故に他人の自由を害せざる樣に自己自身の自由を活動せしむることは即ち自由の法則なりと云へり之れを以て之れを見ればカント氏の自由法則なるものは各個人の自由を總合したるものにして此意味に從ふときは結局國法は即ち自由の法則を規定したるものなりと見做すも敢て妨けなきが如し之に於て又た個人主義の倫理思想は結局各個人の自由を認識する所の大組織なかる可らざるに至れり尙ほ吾人の思想を一轉して之を政治上より考へんか西洋の思想家中に科學的虛無主義 (Scientific Nihilism) なるものあり其主義とする所如何を考ふるに彼等は今日の如き行政々府の不必要を主張するものなり其說に曰はく

政治上より論ず

科學的虛無主義

各自他人と衝突することなく自己の思ふまゝに或は耘し或は獵し或は衣食の

爲めに勞し或は山野に遊行するに於ては別に行政々府の手を煩はす迄の必要なし

と然りと雖も此の如き所論は夢中の夢とも云ふ可きものにして決して多くの者互に集合して砂礫の混在の如く極めて放漫に又た極めて制裁なく各自皆其心の欲する所に向て自由行動をなし而かも互に衝突矛盾等之れなからんことを希望するが如きは到底現實たらしめ能はざる一種の理想空想たるに止まるなり世人或は言はん

社會人文の進歩今日の如き場合に在りては或は然らん世人が進化の結果皆聖人の如きものとなる時到らは今日の如き政府は無用なりと云ふを得べきに非らずや

と素より各自皆聖人となり得可きを想像するすら早や已に一種無用の想像なり故に其他此の想像に附隨して考ふることは總べて無用の事共なるが故に此の如き理想は暫らく之を措き現今の社會に對し各自皆獨立自尊の主義を主張し一度國家を解散することありとせんか必ずや各自の間に衝突起り結局復た國家を組

織し法律と兵力とを以て之を支配するの必要を生ずるや明かなり終りに臨んで國家を以て約束によりて成立したる者なりとの說を論駁して以て變格なる個人本位を以て滿足する者を打破せんとす抑國家は個人の便宜上より約束に依りて組織したるものにあらす其初め動物的混在の時代に在りし人類が漸次進んで同情に打たれ愛情に驅られ社會的生存を營みてより國家は數千年の經驗を經過して發達したるものなり而して個人は已に發達したる國家中に生れ來たりたるものなり此點より之を見るときは國家は個人に比較して無限大の經驗を有するものなれば個人の意志を以て國家の行動を云爲せんとするが如きは恰も蟷螂の斧に比す可く國家の約束的製作物にあらざること亦た推して知ることを得べし然れども吾人は又た假令國家を以て約束にもあらず個人の合意より成立したるにもあらず必竟人類固有の本能より出てたるものなることを論ずればとて直ちにこれが爲めに個人は徹頭徹尾國家に服從す可き義務ありと云ふにはあらず共同生活の上に於て不都合あるときは假ひ輿論に反對することあるも大に其不法を唱ひ其國家的組織を改良するの權能を有するものなることを認むるは勿論なり

何となれば如何に國家が國家的行動を營めばとて個人を離れて國家獨りが存在するものにあらず國家の漸次進歩發達する所以の者は或は有意なると無意なるとを論ぜず一般國民によりて助長せられ改良せらるゝものなれば時としては共同生活の上に於て不都合なることを發見して之を改善せんとするは素より一般國民の義務なればなり然りと雖も已に或る一事に對して之れを改良せんとの意志あるときは其効果のあらんことを求むるは之れ又た人情の然らしむる所なりや然らは乃如何なる方法を以て其改良を實行するを宜しとするかさきに述べたる如く已に數千年間經驗を積みたる國家組織に對して僅かに數十年間の生産物たる個人が之を改良するに於ては丁重に之を考へざる可らざるは勿論之に手を下すに於ては小心翼々必らず其秩序を誤らざる様に警戒せざる可らず或は之を英語にて說明すれば即ち(Constitutionality)とならざる可らざるなり即ち其國の風俗習慣等の正當と見做す所の手續を經て之を改良せざる可らず若し然らずして突飛に輿論に反し其秩序をも顧みず唯だ自己の思想を主張するに於ては假ひ一時世人の注意を惹起するとあるも永久に其効力を奏するとなきを恐る故に自己に

異見あらば正々堂々之れを論じ以て社會の輿論を惹き起し階を踏み序を追ふて漸次改良するに於ては毫も憚かる所なきものとす此點より之を見るときは個人の意見を實行するには必らず輿論の助けを籍らざる可らざるものにして玆に於てか個人本位も亦た國家本位により制限せられざる可らざるものとなれり以上論ずる所を以て之れを考ふるに或る一事に對し個人主義或は國家主義なる言葉を使用すべき場合なしと云ふ可からず假へば財産分配のこと或は政治上に於ける參與權等の如し然りと雖も人生一般より之を考ふるときは個人本位は結局其基を社會に有し國家本位は其元を個人に置き兩者相俟て初めて完全するものにして其中孰れを以て輕とし重となす能はざるものにして已に屢々論じたるが如く眞理は常に兩極端の半に在るとの比喩の如く國家本位に傾けば即ち非個人本位に傾くも亦た非なり國家本位と個人本位とは猶ほ表裏の二面の如く只裏の一面のみを認めて他の一面を顧みざるが如きは妄想の尤も甚しきものと謂ふべし再言すれば獨在的個人の存在のみを認むるは人類の一方面のみを解したるものにして未だ完全數としての人類を解釋し得たるにあらず「我」に二樣の意義あ

り一は即ち具体的「我」にして他は即ち概念的「我」なり前者は獨在的差別的の自我にして後者は彼我の融合せる無差別的圓滿平等の自我なり倫理學の對象とする所の者は前者をして後者に調和せしめんとするにあり個人本位と云ふも國家本位と云ふも共に具体的方面のみを認めて之を對象とせるなり共に一方に偏したる失當の義なり焉んぞ誤なきを得んや

第七章　倫理の主觀的方面に就て

倫理學の起原、正義の觀念と主觀的方面との關係主觀的方面と學者の所說、惡其罪不惡其人說、法律の進歩、復讐手段の進歩

倫理とは何ぞやとの問題は甚だ茫漠たる問題にして簡潔明瞭なる解答を與ふるは頗る困難なることなれば東西の別なく古今の異なく爭ふて皆な一樣に之に正當なる解釋說明を試みんとせり左れば今此等の解釋及び所說のみを排列するも優に一卷の多きに渉たる可ければ已むを得ず此等諸說の共通部分を取りて此れを紹介することゝなす乃て大体の點より觀察するときは古代文物の未だ開けざ

る曖昧にて而かも純乎たる時代に於ては人智發達の程度と云ひ將た社會の組織及び生活交通の狀態と云ひ概して質朴單一にして凡て一を以て拾を兼ねたる所謂一体多方の時代なれば倫理宗教政治法律等は皆其根本を一にしたるものにして必竟一方に於ては人心を柔らげ之に安心を與へ一方に於ては社會の秩序を維持せしむるの具となしたるに外ならざるが如し此の如きは勿論智識の程度社會の組織生活の狀態が單純なるに緣因するものゝ尙又倫理宗教法律は此等本來の性質に於て甚だ混同し易き者あるに由る事ならん何となれば倫理と云ひ法律と云ひ均しく人類を對象とする點に關しては素より同一にして政治及宗教も亦多少の差違こそあれ大体の點に於ては全く其性質を同ふすればなり故に遡か以前に溯れば此等の名稱の差別さへ無かりしや明かなり然るに世の文明漸く進歩するに及では凡俗の常識を以ては安心立命を得るに由なきのみならず特に天象の變に驚き地文の動に恐れ恐怖の念交〻起りて禁ずる能はざるより人類以外の神に依頼して其威嚴に觸れず之を崇拜し之に奉仕して禍害を免れ以て自己の安心を獲んことを願ひ之に關する儀式等の事に至りては早ぐより已に大に發達せり是

れ即ち宗教の起原とも云ふ可く此時代に於ては精神上の制裁に就て最も能く奬勵せられたるは正義の觀念なりしかば倫理及法律は共に正義の觀念を基として自己の罪科を滅し主我的感情を抑壓し社會一般の秩序を正すとに關係したりしと雖も漸次岐れて法律は特に政治上に關し之を制定するにも又た之を實行するにも政治上の權力を用ゆるに至り倫理に至つては敢て政治上の權力を用ふることなく精神上の習慣に訴へ輿論の制裁を以て此を實行し來たりしは遙かに近世の事なりとす

而して先にも已に言へるが如く古代の倫理及法律は現今の狀態とは大に異なりて多くの場合に於て殆ど其區別を見ることを能はざりしが故に法律が外部に現はれたる行爲に對して規定する習慣の行はれたると同時に倫理的制裁も亦た外部に現れたる行爲に重きを置き各人の行爲にして假令其動機即ち精神上の意志が如何樣なるにもせよ外部に現れたる行爲にして尙も正義に反する行爲なりしならんには必らず又た自己の行爲を以て之を償はざる可からざるの狀態なりき故に古代に於ては贖罪と云ふこと甚だ多かりき假令ば之を西洋の歷史に徵するにキリスト敎以外の道德は專ら正義の觀念に基づきたるものにして人若し過失あるときは必然的に之を償はざる可らざるの狀態なりき「眼を以て眼を償ひ」「齒を以て齒に償ふとは是れ實に猶太敎の格言なりしなり」人種の古代の狀態は皆大同小異なりと謂ふを得べし印度に於ても佛敎以前に於ては「人の罪惡は皆自己の業に依て償はざる可からざる」の思想專ら行れたるものにして今日に於てもブラマ敎の思想は古代の思想と云て可ならんか吾國に於ても古代ハラヒト稱して人に過失あるときは相當の償をなさゞる可からざるの風習ありしは歷史に由て明了なる事實なりと知られたり

然るに文物の漸次進むに隨ひ社會の狀態は益々複雜となり其間に現はるゝ所の人情も又た複雜となれるが故に各人其過失を償ふが如きは甚だ困難なるに至れり殊に困難なるのみならず往々大なる弊を生し自己の意志にも非らざる過失の爲めに大なる償をなさゞる可らざるが如きは獨り人をして其責に堪へざらしむるのみならず社會の發達をも害するの狀態ありき假へば甲なる人過て乙なる人を負傷せしめたることありしとせんが甲なる人は亦た其償として乙なる人より負

傷を受けざる可らず此の場合に於て乙なる人甲の行爲を以て意志なき者と見做して之を寛大に免恕したらんには宜に甲者をして無益に負傷せしむるの煩なきのみならず寧ろ甲者をして感謝の念を起さしめ報恩の情を惹起せしむるならん或は又た或る人他人より負債を負ふことありて其期に至るも尚ほ遲滯して返濟することを能はざりしとせんか斯かる場合に於て債主憤怒の情に驅られ直ちに之に嚴罰を加ふるが如きことあるとせんか其負債は遂に之を拂ふに由なきに至らん然るに若しも債主此策に出でずして其果して返濟し能はざるの事情あるや否やを察し若し眞に償還すると能はざるが如き逆境に立ちたるものならば此れを憫み此れを愛し寛大の處置を爲したらんには其人は却て益々恩義に感じて適當に一時に之を償却することなきも必らず幾日かに之を償却するとを得べし故に正義の觀念より之を論すれば「齒を以て齒を償ふ」可きに似たりと雖も如此は只だ無益に人を苦しむるに止まりて他に何等の益する所なし必竟之を社會發達の標準より見るときは無益に人を苦しめ其健全を害する有毒の手段なれば須らく此の如き手段を避け可成社會の發達を助くるの方法を取らさる可からず然らば即

ち若し人の心に惡心あり或は人を害し或は人の財産を使用するが如きことを以て自己の罪惡なりと考へざる如きものは素より飽までも之を矯正するの必要ありと雖も苟も人の心にして善なるときは假令一時過失あるも其過失は漸次之を矯正せしむるこそ願はしけれ故に此理を以て道德は外部の行爲に關する規則より漸次變じて精神上の狀態に移り善心に基づける行爲を以て尤も重んず可きものとなし之を奬勵し之を訓諭するに至れり例へば希臘にソクラテス出で猶太にキリスト出で印度に釋迦の出でたる又た支那に孔夫子の出でたる等多數の碩學現はれ出てゝ皆相共に精神上の道德を重んじ心の改善を以て布敎の大眼目となせりキリスト曰はく

心の中清きものは福なり其人は神を見ることを得べければなり

と孔夫子の言にも亦た中庸に於て左の數句を見る曰はく

天命之謂ゝ性率ゝ性之謂ゝ道修ゝ道之謂ゝ敎。道也者不ゝ可ゝ須臾離ゝ也可ゝ離非ゝ道也是故君子戒ゝ愼乎其所ゝ不ゝ睹恐ゝ懼乎其所ゝ不ゝ聞。莫ゝ見ゝ乎隱ゝ莫ゝ顯ゝ乎微故君子愼ゝ其獨也

とソクラテス及釋迦の如き皆內心の德を重んじたることは其經書中に多く見ゆ

此等の聖人君子の世に出でられたる時代は素より同時代に非らざれば其間に於ける社會の狀態人父の進歩は多少の差違ありしや疑なしと雖も蓋し概して此時代は已に正義一方に基づきたる道德の弊害其極點に達したる時ならん即ち聖人君子が此等の布敎を爲したる所以の者は時弊の反動と見て可ならんか此に於て道德の根本は必ずしも行爲に現はれたるものに限るに非らず「心の善なる」ことを以て之を根本となさゝる可からざることを說き之に由て道德思想を一變するに至りたるなり即ち倫理的行爲を論ずるには單に外部に表はれたる行爲の結果に留意するのみならず更らに此れが根本たる行爲の主觀的意識の狀態に立ち入て論ぜざる可らざることゝなれるなり

或は又た此事實を他の方面より見るときは彼の「其行を惡んで其人を惡まず」と云ふが如き或は又基督敎に「人は信仰により義とせらる可し」と云へるが如き皆古代に於て些細なる一つの行爲を惡んで其極遂に其人を憎み終局まで之を追跡し復讐するに非らざれば止まざるの狀態と比較するときは優劣進否實に大なる差違にして如何なる場合に於ても有害なる行爲は之を惡む可く或は又た惡心は之

を惡む可しと雖も一行爲の爲めに其人を惡まず又た假令惡心を有する人と雖も一旦之を改心したるに於ては全く前の罪惡を忘れ善人と見做す可きなり此の如きは乃ち聖人賢人の道德的改良の要旨及規則とも謂ふを得べきが如し夫れより道德は益精神的方面に重きを置くの方向を取りたりと雖も世の一般の有樣に比較して之を云ふときは此の如き高尙なる道德觀は獨り偉人の精神界に映りたるものにして其一般人類社會の網膜に迄で此の如き思想の映りたるが如きは餘程後世なりと謂ふ可きなり其狀恰も東天紅を告ぐるの際に於ては亢たる大木は早く其梢末に光線を受くると雖も谷間まで全く光線を見るに至るには更らに數時間を要するが如し

倫理の主觀的方面を重んずるに至りたる史的證左は尙ほ之れに止まず今之を西洋の文明進歩の具合に就て考ふるに西洋は千有餘年基督敎國なりしと雖も外部の狀態に拘泥するを離れ精神の獨立を重じ基督の精神を自覺するに至りたるは實に近世の事にして其他之を法律に就て考ふるに元來法律は其初め外部の狀態に注目し罪惡の客觀的證據に由てのみ之れを刑罰するの習慣なりしと雖も近來

に至つては大に進歩して更に精神の狀態をも斟酌し過失と故意との區別を明かにし啻に夫れのみならず健全なる精神狀態と精神病との區別をもなし精神病の狀態なるに於ては放ちて其刑罰を問はざるが如きは實に大なる進歩と謂ふ可く亦た實に大なる開化發達と稱す可し或は又た之を道德に就て考ふるに彼の復讐の如きは古代に在りては君父の爲に讐を報ずるは一つの道德上の義務なりと見られたるにも拘らず近來に於ては罪惡刑罰は啻に之を國家に一任したるのみならず人若し心より誠に後悔しる場合に於ては假ひ宿怨ある仇讐と雖も親しく交際するとあるは是れ又道德上の大なる進歩と謂ふ可し由之見之ば必竟道德なる者は其心の善なるとを專一とす可き者にして已に心善なれば其行爲の上に於ては一二の過失あるとも之を怨す可く只だ全然此れを根本より矯正して善心より出でたる善行即ち至善の地位に其身を置かんとを各自に於て勉め勵むこそ肝要なれ倫理道德のとを論ずるに當て焉ぞ行爲の主觀的方面を輕視して可ならんや

第八章　倫理の客觀的方面に就て

復讐手段の進歩

人は自然界中に存在し亦彼は社會を離れず、無學の弊害、客觀的方面と學者の所說、哲學と倫理の客觀的方面との關係より更らに進化哲學に及ふ、

道德の主觀的狀態に由る可きことは前章に於て已に述べたる所なりと雖ども約そ一物体あれば前後左右の各〻異なる側面を有するが如く道德も一方に於て主觀的方面を重ずると同時に客觀的方面も亦た決して輕視す可らざるなり今や予は予の所信に基づき倫理的行爲の客觀的方面に就て聊か述ぶる所あらんとす

抑人は自然界中に存在して天然自然の法則に支配せらるゝのみならず又た多數の者互に相集合して一つの社會的團体若くは國家的組織を構成ずるに於ては必ず又た其團体社會中に於て社會團体の活動に關して嚴密なる法則の定律なかる可からず人は只其法則に隨て行爲することに由て始めて共に社會中の完全なる一員として生存し得べきなり其生存と法則との關係は猶ほ植物が天象地文の指示する定則に隨て始めて圓滿なる一成長を遂ぐるが如し此場合に於て誤て天象地文の指示する定則に反することあらんか枯死立ところに至らん人の生死も亦斯の如し此故に今吾人が或る一つの行爲を指して罪なりと認め惡なりと稱する所

人は自然界中に存在し亦彼は社會を離れず

以の者は必竟するに當該行爲が自然の法則又は社會團体の活動の法則に違背することを形容せる詞にして換言すれば反則行爲の異名に外ならざるなり左れば吾人人類にして罪悪を免れて善爲善行所謂達徳の地位に到らんことを望まんには宜しく先づ此等自然及社會團体の活動に關する法則に對して明了なる智識を求め然る後此を以て基礎となし此道義的智識の判斷する所に隨て行動云爲せんことを要むべし然らば即ち明了なる道義的智識は何に由て之を得べきか他なし學問の道に志すの一途あるのみ此故に如何程倫理的行爲の主觀的方面に屬する學理に欠如たる所あらんには其社會國家一般に及ぼす弊害は決して鮮少ならざるなり例せば子たる者其親に孝ならんが爲めに自己の血液を搾り或は子たる者其親の病痾を愈やすの目的を以て吾が最愛なる妻子を屠殺して其膓を奪ふが如きは共に非行中の非行なるものにして或は一部に於ては多少の利ありとするも社會國家全般の上より見るときは大に弊害あるものと謂はざる可らず文化開明の未だ幼稚なる時代に在つては啻に斯の如き行爲を以て善なる者と認めたるのみならず通常普通者の眞似

る能はざる所なる以て却て之を以て唯一なる布教の材料とまで見做されたるが如しと雖も人文發達の今日に於ては大に戒む可き非行となす而して以上は勿論孰も極端なる例證にして實に稀有なる事柄なりと雖ども其茲に至る所以の者は全く無學文盲にして明瞭なる道義的智識に乏しきが故なり學問の重ず可きことを想ふ可し此故に朱子の如きは倫理の客觀的方面乃ち道義的智識の教養は決して忽諸に付す可からざるものなることを悟りて格物致知の妙理を窮めて始めて道徳の完全なることを說きバンサム、ミル流義の實利主義も亦た必竟倫理の客觀的方面を重んじたる者にして最大多數の最大幸福を以て道徳の根原なりとせり實に然かのみならず最大多數の幸福說なる者は古はアリストートルより今日に至るまでの多くの學者が盛に唱導する所にして其主とする所は客觀的に最大多數の幸福を求めんとするに在り最大多數の幸福說必らずしも何等か嫌焉たる所なきにあらざるも或る度迄では此種の所說固より可なり而して最大多數の幸福を求めんとするには如何曰く學問と修養とに由て天然の法則及社會活動の法則に通曉せざる可らざる也果して然らば道徳家たらんと欲するものは必ず天地萬有の理

哲學の任務

に通ぜざる可らざるか是れ往々倫理學者一般の苦しむ所なり

熟ら々々考ふるに吾人々類の智識如何に能く發達したればとて大宇宙大社會に比しては素より小天地界たるを免れず加之吾人の生涯を以て天地萬有に較ぶる時は眞に暫有的の者なるを以て時間の點より云ふも之を空間上の關係より推すも共に一定の制限ありて到底絶對的の意味に於ては素より萬有の理に通ぜんとするが如きは吾人の希望し能はざる所なるのみならず亦た實際に於ても成し能ふ所にあらざるなりこゝに於てか哲學の必要を生ず何んとなれば哲學は即ち極致の學にして「哲學とは何ぞや」との問題に對しては古來多くの學者の試みたる解釋必ずしも全然一致する所に非らずと雖も予は玆に一の解釋を有す即ち

哲學とは一種の假想の智識なり詳言すれば哲學とは宇宙萬有に對して其當時に於ける人智の及ぶ限りに於て究明し得られたる智識を總合統一したるものなり故に哲學は必らずしも萬有の理をすべて總合したるに非らざるも假りに其當時に於ける智識を總合したる者なるが故に之を以て絶對的に深邃なるものと假想し萬有の學理と見做すものなり

哲學と倫理の客觀的方面との關係

此意味に於て哲學は倫理の客觀的基礎を與ふる者なりと謂ふを得べし然りと雖も其哲學なるもの又た必しも或る一時代に於て一定し得べきものに非らず同時代に於ても多くの哲學を並び有するものなり假へば現今獨逸に於けるハルトマンの哲學あり將たショペンハウヰル、ヘーゲルあり或は又た東洋に於ても種々の哲學あり故に哲學を以て倫理の客觀的基礎と見做すも亦た漠然たる思想なるが如しと雖も予は特に指す所ありて之を謂ふものなり

進化哲學の妙理

現今の科學の程度に於て宇内の活動を總合する所の哲學は即ち進化論に外ならずダーウヰンは動物進化の理を研究し之に附屬する所の理を研究して進化を應用したる人なり其後動物進化の理は之を萬事に應用して一種の哲學となりたるなり然り而して今之を社會の進化に應用するときは動物の進化と少しく其趣を異にする所なきに非らず動物の進化に於ては已に發達したる後の狀態を後より觀察して之を研究し或は僅かなる經驗を施し或は人爲的に多少之を變更し得べしと雖も之れ甚だ少部分と云ふ可し人類の進化に於ては即ち然らず所謂自然陶汰に對して人爲陶汰なるもの甚だ多し然かのみならず將來に關する進化の方向

に就ては人爲を以て大に之を變更することを得べし即ち人の理想は其進化の目的となり得るものなり素より理想必ずしも進化の目的たるにあらず往々空想に止まることある可しと雖も合理的理想は進化の目的たるを得べきなり少くとも吾人は斯かる合理的理想を發見せんとしつゝあるものなり此點より之を見るときはベーコンが格言に隨ひ「吾人は先づ進化の理を明かにし其進化の法則に隨て云作せざる可からず」此法則に服從して所謂利用厚生の道を講し天然界を一轉して吾人の奴隷たらしむることを得るものなれば之に依りて吾人は漸々其理想に近寄ることを得社會の進化とは蓋し此謂也

以上論ずる所を以て之を見れば吾人は有らゆる點に於て天地萬有の理を究明することを能はずと雖も大体進化哲學の理を究め之を以て全智識を統一總合したるものと見做し進化を助くる行爲を以て善と名け進化を妨害するものを惡と云ふなり素より各個行爲に就て其果して進化を助くるや將た又た進化を妨ぐるやを定むるに於ては甚だ困難なることとなるも之れに大体の標準を與ふることは決して困難なることに非らず此の如き性質のものに於ては如何なる方面より論ずるも「物指」を以て物体の長短を測るが如きは到底爲し能はざるものなれば自然の變化社會の進化を以て倫理上の客觀的法則と見做すが如きは比較上精密なるものなりと信じて不可なかるべし

第九章　宗教論

宗教の意義、宗教の起原と其特質、客觀的觀察、主觀的觀察、知及情と宗教との關係、迷信は宗教の最大要素なり、宇宙惡情、結論、

先に宗教は益々人文的ならざる可らざることを論じたれども今少しく宗教の大体に關する思想を述べて特に倫理との關係を論するは大に必要あることゝ信ず宗教とは何ぞや宗教とは倫理と密接に關係するものなりと雖も又た自ら異なる所あり倫理は其主觀的方面たると客觀的方面たるとを問はず結局人類相互間の關係を正すを以て目的となすものなり然るに宗教は人と天然との關係より生ずる所のものにして假へは吾人が天變地異を見て恐怖の情を起し之に調和せんことを求むるときは已に宗教なり或は又情慾を滿足せしめ全心之に依て安堵した

宗教の起原と其特質

るが如き時に於ては已に又た之れ宗教と云ふを得べし印度の如き天變地異の烈しき地方に於て國民の心意界中特に恐怖の念最も著しく現はれ天然界を以て之を神なりと信じ之を敬ひ之を貴び且つ之と和せんとする所に於て宗教現れ又た希臘の如き樂天的地方に在りては天然の情慾を擅にし天然界を樂み情慾を滿足せしめたる所に宗教あり故に希臘古代の宗教は今日より之を見るときは往々不道徳と云ふべきもの少からず如此は獨り印度及希臘に於てのみ例を見るに止まらず孰れの國に於ても是等二種の風俗互に相混合して併存するものなるが如し之を以て之を見れば宗教は天然と合し安心せんとを求め或は既に安心したる狀態なりと謂ふを得べきか

客觀的觀察

尙ほ之を周密に研究せんとするときは宗教を以て之を主觀的及客觀的の二方面に別ちて考察せざる可からず

今之を客觀的方面より見るときは宗教には各崇拜する所の者あり人智進歩の程度に依りて其崇拜する所の者種々異なるものなり假令は孤狸の崇拜より神佛の崇拜に至る孤狸と神佛とは素より其性質大に異なると雖も同じく之れ崇拜の目的物たる以上は必ず其間に共通の性質なかる可からず其共通の性質とは何ぞや乃ち之を崇拜する人の想像上に於ては之に依頼して自己の安心を求めんとするに外ならざれば孤狸も神佛も同じく之を崇拜する者即ち宗教者に主觀的安心を與ふる者たるや明かなり素より孤狸は神佛との例は甚だしき極端を示したるものなりと雖も斯く人智の程度の異なるに隨て或は孤狸と依りて安心を求め或は金錢を積みて安心せんことを求め又た或は智識を賢くして安心せんことを求め或人は神佛に依頼して安心せんことを求めて安心せんことを求め或る人は哲理を究めて安心せんことを求め或る人は世に効績を殘して安心せんことを求む必竟各自其主觀的狀態に依りて之に安心を與ふる所の客觀的狀態各異なるが故に哲理に依りて安心を求めんとする人には佛神の利益解す可からず金錢を貯蓄して安心せんとする人には哲理の妙味解す可らざるは必然の義なり此故に宗教の客觀的狀態乃ち崇拜すべき目的物は必ずしも一時に之を一定すること能はず人智漸く進んで各自皆平等の位置に達するときは衆人の崇拜すべき目的物夫れ或は一定するならん佛教者は乃ち其時に於ては佛に依りて皆安心す可きなりと謂ふべく基督教者は乃ち

基督に依りて安心す可きものなりと考ふるなるべし恰も善し吾國宗教界の目下擾々たる所以の者は必竟崇拜する所の目的物の競爭時代なれば予が所信に訴て之を考ふれは佛と云ひ基督と云ふ必竟是れ天然の理に基き人情の奥義に基つきて之を說きたるものなれば敢て孰れの敎義を以て哲理と相容れざるものとなし或は又た孰れの敎義を目して人道と相反する者なりと謂ふ可きの理あることなし此點に關しては共に何等の優劣あることなく同等同位のものなり然らば則ち人智發達の終局に於て人の依りて以て安心す可きものは必ずしも之を佛と云ふに及ばず之を基督と云ふにも及はず或は又た之を哲理なりと限るにも及はざるが如し皆人道を究はめ人道を得て安心せんとするものなるに外ならざれば基督にも人道在る可く佛敎にも人道在らん哲學の中にも亦人道あるや勿論の義なり其中尤も大功なるものは只之を智識の上に自發するのみならず自ら之を實行するに於て初めて人道の妙味を解し得べきものとなす基督と云ひ釋迦と云ひ或は其他の聖人君子は人道を皷吹する上に於て其効績決して劣らざるが故に之を尊敬し之に倣ふは善し然れども其一方にのみ拘泥して他を排するが如きは既に業

に宗敎なる者の根本を誤れるものなり故に予は將來宗敎の客觀的崇拜物は人格を有したる神にあらずされば乞て萬有神敎一派の奉する如きものにもあらず又哲學者の所謂本体の如きものにも非らず實際の社會に活動する所の人道に外ならずと信じて疑はざるなり

次に宗敎を主觀的方面より論ずるときは之を說明するに先ち少しく吾人の精神界のことに就て說明せざる可らず乃ち吾人の精神は古來の傳說の如く一の固定的靈魂の作用に非らずして必竟活動の集合にして其活動の能く總合統一せられたるものあり又能く總合統一せざるものあり俗に所謂血の多き人の如きは思想常に散亂し或る時は此事に注意し或る時は忽ち忘れて他を注意し種々に岐るる者なり故に元來人の精神は初より秩序的の統一を有するものに非らず敎育と修練とに依りて始めて收得せられ得べきものなり且つ又た其人の精神に依りて僅かの習練に依りて容易に精神の統一を得るものあり多くの修練を積むも到底統一し能はざるものあり之に依りて其人の人格に大なる差違を生ずるものなり凡實宗敎家たるべき精神狀態は如何なるものなるか乃ち全心統一して一方に向か

ふの狀態なかる可らず人若し或る事物に就ては佛を信じ或る事柄に就ては之れに反するが如きことあらば假令外面上其人は他の宗教信者と異なることなきも已に之れ明らかに宗教信者たる資格を失したるものなり然りと雖も若し其人の精神中に自覺する所ありて基督教中の一部佛教中の一部を執り自己に之を總合する所あれば之れ已に其人は宗教家たる資格を有せるものと謂ふ可きは勿論なり一般に謂ふときは何事に拘はらず人の全力を盡して一途に爲し遂げんと勉むるときに於ては比喩を以て其人の宗教と云ふことあり假へば大工が自己の大工業に全力を盡し俳優が自己の藝術に全力を注ぎ他を顧みるに遑なきが如き場合に於ては之を其人々の宗教と云ふ然れども之れ非也眞正の意味に於ての宗教は神聖の客觀的狀態と符合せざる可らず故に彼の大工の如き俳優の如き其主觀的の狀態に於ては假令宗教家たる資格性質を備へたりと云ふ共未だ失れのみにては彼は宗教家なりと云ふ可らず之を以て自己の天職と見做し之を以て自分は人道を盡くしつゝありとの自覺を有するに於て初めて宗教家と云ふを得可きなり以之見之宗教の主觀的狀態は宗教の客觀的狀態と合し乃ち人道を以て之れが基

礎根底たらしめ各自其職業に全力を注ぐを以て宗教と云べきが如し

然りと雖も人の精神活動は知と情との兩作用の爲めに轉化するものなるが故に假令知的判斷に於て「斯くある可し」「斯くあるからず」等の理を悟るとも未た之れのみにては直ちに其人の精神を指して宗教的狀態なりと斷定すること能はず之をして宗教的狀態ならしめんには必ず一種の情的信念を具備せざる可らず例へば古來よりの宗教に於ては或は恐怖の情を利用し斯く〳〵の事を爲せば神罰ある可し斯くゝゝの行爲あれば神の恩惠ある可し等の制裁を以て凡百の感情を支配し來りたる事は世の普く知る所なり必竟宗教に就きて世人の所謂迷信なるものは實に之れが感情を支配する勢力の強大なる所にありて存するなり迷信素より排す可きに似たりと雖而かも宗教が人心を感化し或は又人心を一點に集合する所以の者は主として感情的の迷信あるが爲めなりとすれば宗教の弱點は素より迷信に在りと云ふと雖とも然れども此迷信は又其當時に在りては宗教上甚だ必要なるものなり只だ知識の進歩したる後に於て過去の狀態を溯察して迷信と名

付けたるまでにして其當時に在りては素より迷信なりと思ひたるにはあらざるなり今日と雖ども此れを信ずるものゝ身に取りては決して迷信なりなどとは夢想だに思はざる所なるべし此等をしも否定して一切是れ迷信なりと云はゝ今日一般哲學者が研究上得たる所必らずしも之を眞なりと斷定する能はず幾千年幾百年後には今日の碩學の所説を以て或は之を妄想若しくば迷信として笑ふやも計り難く如此く考へ來れば萬事皆疑惑に陷り吾人は何に依て安心を得べきかを定むるに由なきに至らん宜しく今日は今日の知識を根本として其程度に於て尤も合理的に尤も人情に適したりと思ふ所を以て眞理なりと認むるより他に吾人の精神上の要求を滿足せしむる方法あることなし基督教者は神を信しキリストの爲に人を敬尊し之に對し一種云ふ可からざる感情を有するならん佛教者は佛に對し又た其教理に對して曾に之を會得するのみならず一種言ふ可からざる感情を有する事ならん是等の感情は或は之を宗教的感情と云ふべしと雖ども又其感情は曾に人類界の全圍を包含するのみならず其認識中には宇宙萬物をも包含し之に對して一種の依賴的壯嚴的又た服從的等の感情を起さしむるものなるが故

に之れを宇宙感情と云ふも敢て誤りに非らざるを信ず宗教には必ず此宇宙感情なかる可らず此宇宙感情が宗教家の精神全躰を支配し例へ喜怒哀樂の感情の如く特種の狀態に於て明了なる差別を有せずして所謂無差別なる一般感情の如く之を執へんとすれども其何處に存するやを定むると難かるべきも暗々の裏に在りて終始一樣に精神全躰を支配すると恰も吾人が平素空氣の壓力を感ずることなしと雖ども其壓力の範圍を脫する能はざるに均し夫れ然り然りと雖も宇宙感情發のするや必ずしも或る特種の確定的觀念の存することを要せず吾人が宇宙に對し特に生死の觀念に對し或は世の無常を感ずるよりして觀念を發するものにして佛教者は佛の觀念或は阿彌陀の觀念に依りて觀念を發するならん基督教者はゴット或は基督の觀念に依りて此觀念を發するならん之を佛と名づけ阿彌陀と名付け若しくはゴット或は佛と名つくるは必竟歷史上に締因する所の者にして人生の本躰より之を見るときは寧ろ偶然の事情なりと云ふて可ならん孔夫子が之を「天」と呼び哲學家は之を「宇宙の本躰」と云へるも皆此人生內部の要求に基ける宇宙感情の現れたるに外ならざる者なり此理に依て之を見れば宇宙感情なるものは

人生の要求に依て發する者にして故らに之に名命するの必要あるに非らず然りと雖ども吾人の思想を社會に發表するに於ては又た或る言語を以て之を言ひ表すの必要生ずるなり然らば如何なる言葉を以て之を言ひ表さんとするか此感情を惹き起さしむる客觀的狀態に依りて命名するを以て至當とず故に若し服從の觀念特に著しきときは之を服從的感情と云ふ可く恐怖の觀念尤も著しきときは之を恐怖的感情と云可し去り乍ら先に宗教の客觀的狀態に於て述べたるが如く予は人類發達の進行を支配する所の人道を欽慕するの念より發せるが故に或は之を人道的感情と稱するも可なりと信ず此感情ありて吾人の心を支配し始て精神を宗教的狀態に保ち續くることを得べきなり

以上論ずる所に依りて之を考ふるに宗教には約そ三つの最も大切なる要素あるが如し即ち左の如し

第一、信徒の注意を惹起し其信念を生ぜしむるに足るべき客觀的觀念の存在

第二、精神上自己の運命を想像し全心を盡して自己の運命を完からしめんことを希望すること

宇宙感情の變形

結論

第三、兩者の關係上より發する一種の宇宙感情

乃ち是れなり如何なる宗教と雖も此等の三要素は必らず之を必要となす者なることを信ず又第二第三の要素に至りては如何なる宗教信者に於ても其觀念を異にするものに非らず必竟唯だ其度合の異なるを見るのみ只だ第一の要素に至りては之れと異なりて必竟宗教の差違を生じ宗派の相違を見るに至るは主として此第一要素の異なるより起るものなり而かのみならず此要素は萬人に通じて同一なること能はず人智發達の程度に依りて異ならざるの必要あるべし唯だ結局の場合に至らば遂に如何なる者に歸着す可きかとの問題に至ては或は萬人一に歸す可きものならざる可からずと雖も此の如き理想は幾千年の後人類の智識皆平等に進んで相共に最高の地位に達したるの後のことにして到底今日之を豫定するよ能はざるなり故に今日の狀態より之を考ふるときは只た其變化の傾向を示すの外爲し能はざるものなり乃ち古代に在りては天然物を以て皆人類の如くに有情のものと認めたるが故に或は之を恐れ之に依賴し之に服從するの念を生じたるも人類以外に在りて人類の有する如き人情を持ちたる神の存在

することは今日の智識の進歩したる者に於ては之を信することと益〻減少するが如き傾向を示し又哲學者に於ては宇宙の本体の存在を認め之に服從するの傾向ありしも宇宙の本体とは果して如何なるものなるやは各哲學者の意見によりて其說明解答各相異なるが故に一般世人をして之に服從するの念を生ぜしむることと甚だ難かりしを以て哲學者の所謂宇宙の本体なる者は必竟之れ宇宙に存在するにあらずして主觀的のものにあらずやとの思想を有ずるもの多きに至れるは其實例なり而して一方に於ては科學の進歩あり他の一方に於ては近世社會の益〻發達するに依り之を人文的に解釋するの傾向は愈〻著しきが如し人文的とは何んぞや社會の發達之に表はれ又た直接社會の發達に關する所を實驗的に攻究し之を以て神の觀念に代へんとするの傾向を云ふなり

故に一言に之を云へば人道なる觀念を以て之を宗教的に見做さんとするの傾向之れなり是れさきに予が宗教は益〻人文的に赴くの傾向を有すと云へる所以の義にして此等の理由を以て推考するときは所謂歷史的宗教の如く人類以外の存在物に依頼し或は服從するが如き宗教は人知の發達と共に漸〻衰ふ可しと雖も直接人類の發達に關係ある人道的宗教は人類の進歩と共に益〻發達す可きものなりとす

第十章　倫理學と倫理政策との別及相互の關係

倫理學の意義、倫理政策の意義及び比較選、倫理學は倫理政策に基礎を與ふ、倫理政策と主觀的方面及客觀的方面との關係、學者の所說、年齡及び時勢と倫理政策との關係、快樂經濟及苦痛經濟と眞慾主義及大望養成主義の二法、

倫理學とは何ぞやとの問題に對しては多岐多樣の解釋を試みられたることはさきに已に畧述せるが如しと雖も今や更に倫理學と政策との區別及び此等兩者の關係を明にせんが爲めに聊か倫理學なる問題に對して再び解答を與ふるの必要生せり即ち倫理學は人類相互間の秩序を正し所謂世間に於ける人倫を明にせんとするの學なり然りと雖も今若し之を倫理政策と相對稱して其區別を明らかに

倫理政策の意義

せんとせば倫理學は萬古不易の人倫を明らかにせんとするものにして倫理政策は實際の社會に就きて之を應用し或ば之た人を敎育して人倫を正さんとするの方法を講究し且つ之を實行せんとするものなり故に倫理學に於ては他の科學と同しく倫理的事實に基き又精神の倫理的性質に基きて普遍の法則を研究するものなるが故に或は之を科學と見做すものあり或は倫理の基礎なるものは徹頭徹尾之を歸納的に發見すること能はず或は先天的理法を根本として倫理學を組織せんとする方面より之を哲學と見做すものありと雖も倫理政策に至ては必らずしも普遍の法則を發見せんとするに非らず已に名の如く一種の政策なるが故に實際的社會の活動を直接に支配せんとするは其の目的たる可きなり故に倫理政策の根本としては素より倫理主義を假定して之を標準となすの必要ある可きも然れとも必らずしも之を格言となし或は之を主義として云ひ表はすの必要あらず所謂高等なる倫理的常識を根本とするも可なる者なり倫理政策の特質にして而かも其最も必要なる任務となす所の者は時代〳〵の風俗習慣に應じ時運に投し大勢に隨ひ矯正すべくは之を矯正し發達せしむ可くは之を發達せしめ時々の

吾國の倫理政策の變遷

變に應して人心の向ふ所を指南し之を助け之を導くを以て目的となすに在りと す此故に時勢變遷の性質に由りては緩急の違を生ずべく寛嚴の差を呈するは勿論甚しきに至ては昨は平等主義の倫理政策行はれたるにも拘らず今は飜然として階級主義の倫理政策行はるるが如き全然反對なる現象を見ることあらん之を帝國の史乘に徵して按ぜんに吾が國古代の國民は愛國の志氣に富み敵愾の心甚だ深く一般に進歩的性質最も優れたるものにして今日と雖も此美德を捨てず個人の權利なるものも大に發達し又た發達せしめんとするの氣象に富めるは萬人の均しく認むる所なり然るに王朝の末年綱紀愈〻紊れ藤氏の專權より大政漸く下位に移らんとするの傾向を呈し遂に治承年間源頼朝覇府を鎌倉に創してより爾來吾が帝國の國体は全く其性質を異にし王政廢して武長政治となるに及ては武家獨り其權威を擅にし外他の臣民屏然として其下風に立てり之れ正しく比較上臣民を平等視するの倫理政策已みて階級主義の倫理政策生れ出てたるものにして他語を以て之を云へば自重自尊の倫理政策衰へて自卑自屈の時代に遷れるなり特に德川時代に至ては下民箇箇の方針を取り武は益々尊く民は愈々賤しく

階級の差實に其極點に達し所謂士農工商の區別さへ起り上級に在るものと下級にあるものとは恰も先天的に上下の別をなされたるかの如く上級のものは過度の權力を有し下級に在るものは殆ど奴隸の姿となり自卑自屈の觀念を以て國民思想の中心となしたれば絶對的服從主義の倫理政策は遂に動かす可らざるものとなれり然りと雖も明治の御代に於ては大に其面目を一變し幾百年間壓世主義の行はれたる結果たゝに個人の權利を無視したるのみならず個人の權利を擴張せんする精神をも痲痺せしめ多くの人民は其習慣に馴れ今日此の難有御代に於てすら尚ほ自ら奴隸的氣質の未た全く脫せざるものありて甚しきに至つては却て之を喜ぶが如き狀態なきにしもあらず此に於てか福澤翁の獨立自尊の修身要領を見るに至れり翁の主義とせらるゝ獨立自尊なるものは倫理學の主義として之を批難するは暫く之を措て論ぜず之を今日の時代に處する倫理政策とすれば實に其當を得たるものなりと信ず素より多數人民の中には已に自己の權利を擴張せんとするの餘り自儘に逸する者あらん隨て其反對主義なる服從主義を敎ゆ可き場合少からず小學に於て兒童に對し倫理を敎へ又た家庭に於て倫理を敎ふ

るが如き場合に於ても亦大に服從主義を敎ふ可き場合多きとは之を認むと雖も社會敎育として即ち丁年以上の者に對し國民一般の人心を皷舞せんとするに於ては予は寧ろ獨立自尊の必要あるを認むるものなり否獨立自尊は獨り一身上のことに止まらず國民には國民の獨立自尊なかる可からず時勢の變遷によりて倫理政策移動すること尙ほ此の如し則ち時勢と共に將來或は服從主義を皷吹するの必要なる時代來ることあるべし然るときは其時代に於ては政策を代ふるも敢て惡しきことにはあらざるなり之を要するに倫理學は理論的側面にして倫理政策は實際的側面なり前者は畫一不變なれども後者は臨機應變のものなり然るに世人動もすれば倫理學の不易なるを捉へて直ちに實際的側面も亦不變なることを咯々するものあるは必竟此等兩者の區別の明かならざるより來る結果なりと謂ふ可し

然りと雖も倫理的現象を論究するに當りて此を理論と實際とに別つは唯だ解明の便宜によりたる迄にして決して絶對的の意味なるに非らず之と同時に亦た兩者の關係頗る密接にして本末源季の關係あるものなり此故に倫理政策を以て如

何に移行的のものなりと謂へばとて之に關する研究は只だ其時代々々の必要に應して政策を立つるものとなして之を其當時に於ける常識に富みたる大智識家の所爲に一任し倫理學者之を研究するの必要なきものなりと見做す可きか是れ又決して然らざるなり古來倫理を論するもの其學理的方面を論すると共に多少其政策に論及せざるものあらざりき是れ或は躬ら自覺する所あるに由るとあり若くは識らず知らずの間に論ずるものなることありソクラテースは「眞正の知識を以て殆ど世限の勢力あるものと見做し眞正の知識を求むるは即ち道德なり」とまて論及せり氏が此論をなす蓋し其時代の所謂詭辯論者が知識を乱用したるに反動したるものにして其時代の政策と見做さゝるを得ずと雖も然れとも氏が如此知識を無上に尊重したる所以のものは抑又學理と實際と互に密接不離なるが故に遂には倫理政策を以て倫理學と混同したるには非らざるか或は東洋に於ける倫理學者に就ても荀子が性惡說を唱へたるも學理的方面を說くと同時に一種の倫理政策を唱導せる者と見做す可きなり乃ち之に由りて倫理の敎育を皷吹するの方便となしたるものなり然らは則ち倫理政策も亦た之を研究すれば自ら學

理的基礎を有せざる可らず而して之れが基礎は抑何に由て得らる可きか曰く倫理學に依頼するより他に何等の策あらさるなり然り而してさきに已に論したるが如く倫理の主觀的方面に於ては唯だ心の善なることを專一に求む可しと雖も其客觀的方面に於ては吾人の行爲は只だ心の善なるのみを以て未だ滿足すること能はす必らずや天然の法則と符合せざる可らず社會發達の理を究はめて此れと符合せさる可らずとなすときは倫理政策としては勿論實際的社會の活動に合するを最重要となす此意味よりするときは倫理政策を重んずるは一見所謂實利主義に傾くの傾向なきに非らずと雖此の如き見解は只だ其一方面のみを見て他の方面を顧みざるより起る誤診の見解なれば聊か倫理政策と倫理の客觀的方面即ち社會活動とは如何なる關係を有するものなるかを論究せんとす

倫理政策は社會的事業なり即ち各個人自己の修身を目的とするに非らずして實際の社會を敎育し之を導かんとするの方法たるなり故に其主とする所は個人に非らずして實際の社會たるべきは勿論の義にして特に倫理の客觀的方面に重きを置くものなり然りと雖も倫理政策上の手段としては又た個人の修身をも之に

學者の所說

關係せしめ却て主觀的方面を重んずることあり何となれば如何に理法としては客觀的社會活動を主とすればとて之を實際に行ふに於ては行爲者其人の意志を藉らさる可らざればなり故に今倫理政策の立脚點より暫らく一般の倫理問題を論せんとするに當りては先づ倫理政策に於ては果して主觀的の方面に重きを置くものなるか將た客觀的方面に重きを置かしむ可きものなるかを確めんとするさきには倫理を主觀的方面より見たるとに區別せり然りと雖も之れ唯だ事を分析して研究の便利の爲めに差別を立てたる迄でにして實際に於ては兩者相俟て活動するものたること云ふを俟たざるなり獨り事實に於て然るにあらす此等兩者本來の性質より考ふるも主觀的方面を離れて客觀的方面の獨在するものに非らず却て全く二者一に歸せんとするの傾向あるが如し試みに治國平天平の精神に就きて大學の所謂八ヶの條目を擧くれは曰はく

古之欲明明德於天下者先治其國欲治其國者先齊其家欲齊其家者先修其身欲修其身者先正其心欲正其心者先誠其意欲誠其意者先致其知致知在格物。

物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身修。身修而后家齊。家齊而后國治。國治而后天下平。

即ち天下を平かにせんと欲する者は先づ其國を始むるより始まり其身を修めんとする者は先づ其心を正ふせんとする者は先づ其意を誠にすと乃ち客觀的社會の倫理を目的とするものは先づ個人の意を誠にするに在るとを明らかにし更らに進みて其意を誠にせんとするものは先づ其知を致し物を格すに在りとて主觀的倫理の根本をも亦た併せて推究するときは普ねく天然諸物の理法に通するに在ること勿論なりとせり然らば乃ち始めは天下の事を論じ中ばに至て主觀的狀態を說き最後に復た天然諸物の理法に通ず可きものなるを論じたることを想ひば結局主觀的方面と客觀的方面とは決して離す可きに非らさると明らかなり此の如きは獨り東洋の倫理學に於て之を見るのみならず西洋の倫理學者に於ても亦た大に之に類したるもの鮮からず例令ば獨逸の碩學カントは自由意志を根本として倫理の基礎を定めんとし其哲學に於ては天然の活動を支配する所の所謂原因結果の法則は決して意志の活動上に及ばさるものなることを明せんと務めたり換言すれば意志の活動は原因結果の法則以外に超越するも

のなることを論じ此意味に於て意志は自由なりと論定せり故に若し之れに法則あらば意志は意志自身の法則に從ふの外所謂原因結果の法則には從はざるものなりとせり以之觀之ばカントは倫理の基礎を只管主觀的なる意志の活動にのみ求めんとなしたるなり然りと雖も單に夫れのみにては倫理の基礎を立つることは能はさりしが故に乃ち自己の意志と同じく又た他人の意志の存在をも認めざる可らざるの理を發見するに及びては自己の意志と他人の意志と互に相衝突せざる樣にとて茲に又た氏は自由の法則の存在を認めたり此意味に從ふときは氏の所謂主觀的自由の法則なるものは結局客觀的社會の法則にして所謂國法なるものは主觀的法則の漸く客觀的法則となりて現はれたる一種の製作品にして其他倫理的禮法、風俗、及び習慣等の如きも亦た其一現象と見做す可きなり然らば乃ち主觀的のものは遂には客觀的のものとなりて社會に存在するものなることとは到底否定し能はざる所ならん論者或は云はん自由法則は意志の活動より發するものにして所謂原因結果の法則とは同一のものにあらず然るに天然現象に屬する客觀的理法は整然として皆均しく因果の定律に照應せざるものなし此故に意志の活動を目して總べて之を客觀的のものなりとなすは誤れりと素より國法及び社會の風俗、禮法等の如きは其の根本に於ては重力の法則、運動の法則の如きものとは少しく異なる所ありて或は之を一定すること甚だ困難なりと雖も之れ必竟實際の社會上に應用さるゝより勢ひ茲に至れるものにして社會の法則となりて現れたるものは果して因果の定律に從ふや否やは如何に不明了なるにもせよ又如何に複雜なるにせよ大体に於ては天然現象の如く其客觀的なるに於て決して天然の法則と區別する所なきを信ずるなり或は又進化論の始めて世上に發表されてより以來多數の學者之を祖述し進化の法則なる一種客觀的の法則に服從することを以て道德なりと見做さんとするものあり是れ取りも直さず客觀的なる法則を基礎として倫理を立てんとするものなり然りと雖も已に論じたるが如く社會進化の法則は全く人爲を離れたる自然陶汰の法則に非らず大に人爲を交ひ吾人の精神作用によりて變更され得可きものなれば社會進化の方向は其進化せんとする人類の性質に依りて容ほ一定することを得べきものなるが如し此に於て進化主義の倫理も亦た純然たる客觀的の作用の法則には非らずして主觀的

時勢の傾向及び年齢の大小と倫理政策との關係

年齢の大小と倫理政策

作用の大に混合したるものなることを知るに足べし

以上論ずる所に依りて是を見れば倫理の主觀及び客觀の兩方面は全然不可離的のものなりと雖も只だ倫理政策に於ては時勢の傾向と尙ほ又た各個人の年齢等により て或は主觀的法方面を重んずることあり或は客觀的方面を重んずべき場合あるの別を生ず假へば年齢に付きて是を曰はんか兒童は未た社會なる觀念を有せず又家族なる觀念に至つては成人の如く明了にして而かも活用的の觀念にはあらで唯だ實際の單簡なる形式に於て行はるゝ交際に由て父兄及親戚の如き他人に交際するに止まり自己の行爲の最も多くは自己自身の修身上に關するものなれば先づ主親的方面の開拓を重んじて之を敎導するは頗る其當を得たる處なりと謂ふ可し然りと雖も漸く年齡の長するに及びやがて丁年以上となれるに於ては社會なる觀念愈〻明了の度に進むが故に茲に於ては次第に客觀的社會の方面を重んじて之に加味するの必要を見るべし此時に際しては幼少の時より已に主觀的方面は養成されたるものなるが故に社會的方面を重んじて初めて幼時の敎育と相合し完全なることを得るものとす勿論或は社會

の變態の爲めに幼時の敎育を缺き若くは家庭の運命に依りて未だ幼時の敎育を施す能はざりし場合等に在りては假令ひ成人たりとも大に主觀的方面を敎育するの必要あるを感ずることあるべし次きに時勢の變化に至ては其狀態頗る複雜なるが故に之を一括して論ずるは甚だ困難なれども稍其大略に就きて論究するときは倫理政策に於ける主客の關係は又た決して見られ能はざるに非らず

更に時勢の傾向によりて倫理政策に異同を生ずるを說かんに今假りに吾人人類は衣食住に於て何等の不足を感ずる所なく又た社會上に關する名譽の如きも或は又た自己の權力を實行するが如き場合に於ても總べて人類の一般の慾望と云ふものは不足なく滿足され居るものと想像するときは人類社會の道德は大に簡單なることを得べし是れ乃ち儒敎の所謂「常道」の如きものにして一言以て之を言へば大平無事の社會に於ける倫理なり然りと雖も實際の人類社會の境遇は大に之れと異なれり抑世界の歷史を按んずるに古代人類の數少く又た人類の慾望も今日に比して大に簡單なる時代に於ては天然の賜は人類の慾望を充たして尙ほ餘りありたるが如し此時代に於ける社會は即ち黃金時代とも云ふ可きものにし

快樂經濟及苦痛經濟

て人類は如何にして各自の快樂を增進し得るかの思想に向ひたるものと知らるゝ之れ實に予が想像より出てたるのみならず此の如き時代の實際に存したることは普ねく歷史家の証認する所なり此後ち人類は蓋し多數に增加し加ふるに其慾望益〻複雜となれるに及んでは天然の賜を以て衆人の慾望を凡べて滿足せしむるには不足を生ずるに至れり茲に於てか所謂生存競爭を生し尙ほ次第に進むに及んで生存競爭は愈〻劇げしく掠奪併呑の時代となりて勢ひ茲に及んでは世界の經濟は全く一變するの已むを得ざるに至れるなり米國バッテン氏は此現象を以て「快樂經濟(Pleasure Economy)より苦痛經濟(Pain Economy)に移れるものなり」と說けり快樂經濟とは當時の國民一般に天賜の富饒に飽き如何にして自己の快樂を增進せしむるを得るかを講究しつゝあるの狀態にして苦痛經濟とは生存競爭を厭ひ如何にして自己の苦痛を減少することを得るかを講究しつゝあるの狀態を云ふなり快樂經濟は即ち人生の常の狀態によりて起るものなるが故に假令ひ人類異なり國土異なると雖も畧ぼ同一なりと見做すを得べし然れども苦痛經濟に至ては實に其狀態千差萬別にして民族の異なり地文の異なるに隨ひて大なる差異を生ずるものなり其狀恰かも健全なる人體生理は假令ひ人種の異なればとて畧ぼ同一なるべきも病理の狀態に至ては實に其變化極まる所なきが如し之を以て之を見れば世界の歷史上各國國民は皆生存競爭の爲めに大に悶まされ或は人格を破ぶり爲めに大に悶まされ或は人格を破ぶり爲めに大に悶まされ或は人格を破ぶり

きか之れ甚だ疑はざるを得ざるなり何となれば一方に於ては人口は益〻繁殖し人類の慾望益〻雜多に增進するの傾向あるに反して一方に於ては天變地災比年已むなく吾人の慾望は到底之を充足するの望なければなりと之れ素より大問題にして誰人も之れが解釋を下すに苦しむ所なり然りと雖も又た學理の進步より推して之を考ひ或は人類社會一般の進化によりて之を考ひ彼此相對するときは玆に多少の想豫をなし能はさるにあらさるべし予の見る所によれば之を救はんとするには大体二つの方法あるが如し

其一は所謂寡慾主義にして吾人の慾望を抑壓し之を制限することに由りて現時の狀態に滿足せんことを試むるもの之れなり是れ古代に於ける道德、倫理等に在りては一般に採用したる方法にして今日に於てすら尙ほ慾望を制限するとによりて社會の秩序を保たんとするもの鮮かならず然りと雖も近世の科學の進步上より大に社會の狀態を變じ倫理政策に於ても亦た大に之を改むるに至れり玆に於て第二の方法を生ず即ち人の慾望なるものは人生固有のものにして到底之を抑壓することと能はす假令ひ一時之を抑壓することあるが如く見ゆるも其實抑壓されたるに非らず却て表面之を制し裏面に弊害を釀すこと少からず歐羅巴に於ては近世の始めに已に此理を看破し抑壓主義の非なるを悟り人生固有の慾望は滋々之を發達し進で之を滿足せしむるの方法を講ぜざる可らざるの理を証認するに至れり此の如きは素より理論上之を悟りたるにはあらで世界の氣運自ら玆に至れるなり即ち物理學の發達に伴て機械の發明あり航海術の研究を促がし之に由て又た途に新世界を發見せるに及びては人類の氣運一轉して積極的に向ふに至れり玆に於て人は益〻天然の理法を考究し之を究めて後ち之を利用し即ち人爲を用ひて天然の賜を增加せしむるの工夫をなすに至れり必竟生存競爭劇げしく行はれ苦痛經濟の已む可らざるに至りしは人の慾望に應ず可き天然の賜不足したるに職由することなれば人の工夫によりて天然力を利用するの方法を講するに於ては寡慾主義を廢し大望を養ひ而かも尙ほ之れを充分滿足せしむることを得るものとなす現今の歐米の狀態は已に此苦痛經濟の極度を越え元の快樂經濟に恢復せんとする氣運に向ひつゝあるなり然りと雖も今日尙ほ未だ全く苦痛經濟を脫したりと云ふにはあらず前途尙ほ遠しと謂ふ可きなり假りに今若し

富貴の方面のみを標準として之を稱ふるときは合衆國の如きは先づ苦痛經濟を脫し快樂經濟に向ひたるものゝ如しと雖も社會の事素より富貴の一標準のみを以て窺ひ知るを能はず此故に合衆國に於ても尙ほ政治問題及び教育上の問題等に於ては盛んに苦痛經濟の渦中に吟呻しつゝあるや疑なし吾が國の如きは世界列國と交通を開きし以來日尙ほ淺きが故に一方に於ては未だ若痛經濟に陷りつゝありと雖も世界の思想及び文明的物質を輸入し之より漸次快樂經濟に向はんとしつゝあるの狀態なれば宜しく一方に於ては寡慾主義を主唱すると同時に大望發成の主義亦た決して忘る可らず

第十一章　本邦將來の發達に關する意見

問題の意義、倫理政策の國民的發達に於ける位置、抽象的人類は唯だ一なり具体的人類は萬人萬樣なり、自然陶汰、人爲陶汰、古代倫理政策の骨子、選定の困難、倫理政策と品性との關係、品性修養の二方面、積極的方面、消極的方面、倫理と宗教との融合、實際の教育界に對して、

單に本邦將來の發達と稱するも其包む所廣濶に失して或は語弊なきにしも非ら

ず即ち讀者其人の解釋に由ては或は軍事組織の發達と見る者あるべく將た經濟、實業、政治、法律、上の意味にも解釋する者あらん然りと雖とも茲に稱して本邦將來の發達となす所のものは政治と云ふにあらず法律、經濟と云ふにもあらず左りとて軍事交通の意味にもあらず主として倫理道德の方面に關して吾國民が如何なる方向を取り常に如何なる主義に向て如何なる態度を示すべきかの問題に就き て考究する所あらんとするなり要言すれば本邦將來の倫理政策に關し其發達進歩果して如何にあるべきかを豫想し且つ此種の豫想が若しも現實となり得るならば吾人帝國の臣民たるものは今より如何なる心得を維持す可きものなるかに論及せんとするなり蓋し倫理とは已に屢々述べたるが如く生々滾々たる吾人人類を對象となし一切の行動發作に向て設けられたる一切の定律を包むものなれば此定律規にして豫定し得んには外他の法律政治文學宗教等に於ける發達進路の如きは必竟其一部若くは局部的應用に過ぎざるものなれば亦た之に依て豫想を下すも甚しき誤差なきものと信ずればなり即ち國民の倫理的行爲にして其基礎を窺ひ知り得へくんは國民的活動に於ける他の諸現象は必竟此の原動力よ

抽象的人類は唯だ一なり具体的人類は萬人萬様なり

り來る結果に過ぎざるが故に倫理の發達道徳の進歩は所謂國家國民が將來に於ける發達の異名とも見做し得べければなり而して倫理の事深し縦あり横あり經あり緯あり支離錯雑一朝にして解明し能ふ所にあらず而かも短時日の事情あるに於ておや茲に論ずる所素より其の大體に渉るに過ぎず

予は吾が國に於ける倫理の實際的方面即ち倫理政策を論ずるに當りては先づ如何にして倫理政策が國家國體風俗習慣に依りて異なりたる特性を有するに至るものなるかを論ぜざる可らず而して此事は略ぼ倫理政策の性質に關して論究せる際にも附言したるが如しと雖も更らに其細論に渉りて述べんとす

吾人人類なる觀念に對して抽象的に之を考ふれは假令萬里の波濤を隔て萬項の山野を距りたる甲乙兩國民なれはとて大體人類と云へる性質に於ては勿論或る點までは通有せる屬性を具備し身體各部の形態と云はず生理的狀態と云はず特に精神作用に屬せる所謂本能的機能に關しては全く相一致して何等の差別だに無きが如しと雖一歩を移して之を具體的に觀察するときは其趣全然前者と反對にして萬人萬態と云はざるを得ず「人心の異なる猶ほ其面の異なれるが如し」とは古今普通に使用せらるゝ語にして亦實際を穿ちたる形容なり茲に於てか嚮きの平等なるものは即ち差別的異體の者となる而して此の如きは猶り土地空間の關係より生ずる者にあらず更らに時間的關係の上より考ふるも同じく同一觀念に對して平等と差別体との二樣なる觀察を下さしむ平等體の側面より言へは假令古代の人民なればとて中古若くは現在の人民なればとて動物的情慾嗜好及ひ其他身體の解剖的構造等に於ては何等の差異を認めず萬人皆な相均しかるべき理にして一致平等のものなりと雖も差別體の側面より云ふ時は瞳の黒きあり青きあり髪の黄黒褐赤皮膚の紫黄色に於ける等を初めとし言語風俗習慣一として同一平等なるものは絶對的に有り得べからざるものなることを知る一國民一家族と雖も尚ほ且つ然り況んや東西相距り南北相隔たるに於てをや賢愚強弱の差別愈々明了となるは苟も常識ある者の正しく日常の觀察に由て實際に之を信する所ならん是れ抑何等の原因あるに由て然るか予を以て之を見れば凡そ二個の原因に基つくものなりとなす曰く自然陶汰曰く人爲陶汰即ち之れなり左に項を逐ふて說く所あらんとす

自然陶汰

自然陶汰とは自然界か吾人人類の性格を陶汰するの義にして自然の理法に合する者は益々繁榮に何ひ自然に反する者は益々衰運に向ふ此現象を稱して自然陶汰と名づくるなり古來吾人人類を以て或は靈智靈能の實體なりとし或は東洋流義に言へは天地に配して三元の一に置くか西洋流義に言へは神の姿なりなどゝ稱して万物に比して一種不可思儀の威力を有せる神聖體なりと迄に實證せりと雖も之れ必竟人類をあまりに神聖視したるより語氣の茲に至れるものにして實際に於ては自然界の大命に羈約せられて一切の云爲は毫も自由を有せざるものなり自然の理法に合することに於ては或は自由の意味を與ふるも可ならん如何に武力優れたればとて又如何に意志剛毅なればとて自然の理法に乖戻せんとするにに於ては微少なる自由をも之を有せざるものなり今假りに人を以て器物に比すれば自然は猶ほ模型の如く性格は猶ほ形態の如き關係を有するものにして先天的本性は恰も質料に類す而して人類は猶ほ形態と質料とに由て合成されたる器物の如きものなり約そ茲に器物あれは必す之に形態と質料とあるが如く人類あれば必らず茲に後天的性格と先天的本性との二要素あるものなり此場合に於て一器物を構成せる質料が形態に方圓の差あるは一に頑固なる模型に因て然ると均しく人類の初めより具備せる本性が漸く變遷して強弱優劣の性格を見るに至るは畢竟て自然界の模型に因て然るものなり質料にして模型の制限を被らす本性にして自然の陶汰を受くることなしに或は形態を成し或は后天的性格を完成するものなりと言ふとも人誰れか之を許さんや之を歷史に徵すれば斯波太人が勇壯の美德を備ひたる亞典人か才智の妙德を有したる皆な其國の地勢風土の自然的狀態が異なるに歸因したるものにして尙ほ古代印度人民の早くより宗教の思想及算數天文の推究に優れたるか如きは基づく所皆な其地勢に關する自然現象に於ける關係より來れるものなり尙ほ進で心理作用の發達に照らして之を考ふるも容易に此等の關係を發見することを得べし即ち吾人の精神的機能の中に於て忍耐と稱する作用あり今其の發達する順序に就きて考ふるに全く嚴格なる自然の法則在りて決して自放自儘の權能を吾人人類に附與せざるより其始めより放縱的のものが漸く有限的のものとなりて其極遂に茲に至れるものなり此の如き例証は獨り以上の二例に止らず自然の定則に由て吾人の性格の上に變格を來

人爲陶汰

すべきは東西古今何人と雖も決して爭ふ可らざる事實なりとす

人爲陶汰とは自然陶汰と相對する語にして人爲を以て吾人の性格の上に變化を生ぜしむる現象を云ふなり予は嚮きに自然界か吾人人類の性格に異樣なる變格を來さしむることを論せりと雖も之れと同時に人爲界が同一なる結果を呈せしむるは是れ又た決して少々なるものにあらず予を以て之を見れば人類性格の變格に關しては寧ろ後者を以て遙かに其効蹟偉大なるものとなさんとす勿論人類社會を以て自然物及び自然界と解釋するときは稱して人爲陶汰と云ふとも均しく自然陶汰の一局部分に過ぎざるべきも予の所謂人爲を以て特に自然と相對せしむる所以の者は廣義の意味にはあらで狹義の意味に從ひたるものなり而して何が故に人爲陶汰を以て却て其効果著しきものなりとなすかは是れ少しく解釋を要する所なり人爲陶汰は常に敎育及ひ社會活動と云へる二大手段となりて行はるゝものゝ如し而して敎育の意義又は敎授の方法等は必ずしもカント學派竝くはヘルバルト主義の傳ふる所によらざるにもせよ兎も角も心理學的に之を考究するも又之を實際的に考ふるも孰れも多くの觀念は悉く敎授に由りて授けられたるのみならず更らに此等の觀念が充分に活用することを得べきが如く此れに一種の有機的系統を結合せしむるに由りて初めて一人前に精神機能の發育を遂げらるゝものなること明けし更に社會の活動が性格の上に影響を及ぼす所以の理も亦敎育的感化力が被敎育者の心意界に變化を及ぼすと同理にして只だ一般に前者は所謂有意作用に屬し後者は所謂無意作用に屬するの差ありと雖も共に俱に人類の心意界に有力なる變化を來さしむるは尚も普通眼を有する者の均しく首肯する所ならん孔子曰く「性相近習相遠」と妙味の在る所想ふべし然り而して人爲陶汰を以て偉効あるものなりとなす所以の者は他なし古今に由て人智發達の階級に月甚の差を生ずるは東西南北其國土を異にするより來る者よりは遙かに大なればなり何となれば昔時朦昧の時代に於ける人智の甚だ可憫なりしことは萬人の認むる所ならん其の能く今日の如く人文の開發を見るに至れる所以のものは畏げて人爲の作用に屬すと謂ふは少しく形容に過ぎたる弊ありとするも多分は全然人爲作用に基づくものなることは決して失當なる見解にあらざればなり蓋し假令萬年の昔時に溯るも山川の配合地勢の高低等に在りては小異動

兩陶汰の調和併行

こそありたれ大體に關しては氷炭の如き差異あることなく隨て人の性格に及ぼす感化力も亦甚しき蹉跌なからん然るに人爲界に屬する方面に在りては即ち然らず太古野蠻の時代より遂に今日に至りては天象を改竄し地文を利用し山ならんと欲すれば即ち山を爲し河ならんと欲すれば乃ち河を作す隱現出沒の不可思儀を演じ神出鬼沒の妙技を施すも敢て何等の困難を感ずることなきまでに發達したるに非ずや是れ間接に生存競爭より來れる事ながら左りとて又た人爲的に社會の狀態を攪亂することに由て初めて此の進歩を見るに至れるものなるは決して否定し得ざる所なりとす況や進歩の速度將來一層强大ならんとするに於ておや人爲陶汰の効果想ふべし

之を要するに吾人の性格が何に由て培養され啓發さるゝかと云へは唯た經驗と交際とに由て此の目的を全ふすると答ふるを得べく而して經驗と交際とは自然界に向ても之を施し得べく將た人類社會に向ても亦之を施し得べし而して予はさきに自然的の陶汰と人爲的の陶汰とを區別し變化多くして趣味に富むの點より して後者を以て稍前者に優れたりと斷定せりと雖も此の如き區別は素より假定

にして實際に於ては勿論此等二種の陶汰互に相混和して兩ながら人類の性格を壓迫するより初めて古今の相距る地文の相異なるに從て漸く變格を帶び古今東西各特種の發達を見るに至る茲に於てか倫理政策も亦愈々岐れて特色を有するの已む能はざるを見るなり

次ぎに論ずべきは將來吾國の倫理政策に於て骨子と爲すべき主要なる概念なり是れ亦た容易に論定し能ふ所に非ずと雖も試みに之を歷史に照らして之が沿革を見れは稍其大略を把束し得べきが如し今日の所謂國家なるものはルーソーの民約說は素より粗笨なりと雖も或る英雄出でゝ權力を以て國民を征服したるの結果なるは事實の上に於て爭ふ可らざるの事なり故に詳細のことは措て論せず大体の點より之を云ふときは是迄の社會及ひ國家の組織は軍事的組織にして武を以て最上級の者と見做したるとは吾國も亦世界の歷史と其の趣を同ふすと謂ふ可し斯る時代に於ては軍事上に勝れたる者は世に重ぜられ又社會に實際の勢力を有するを以て必要となされたり之れ古來勇氣を以て一の德義と見做し所謂知仁勇として之を國民道德の標準となしたるは乃ち之が爲めなり然り而して今

後と雖も軍事の必要必ずしも衰ふるにあらす社會の範圍擴がり人種の衝突愈々繁しくなりたる丈け夫れ丈け軍事の必要增す可きの理なりと雖も古來の道德に比して少しく異なる所なかる可らず古來に於ては所謂軍事組織にして他の者は之れに附隨したるが如き狀態なりしも今後軍事は國家の權力を維持し或は又之を擴張するに於ての一手段としては其價値決して失ふ可きに非ずと雖も左りとて軍事其物が社會の主動力たるものには非ざるなり今若しスペンサーの言を採用するときは

今後の社會は實業の社會なり

「今後の社會は乃ち實業の社會にして國民の盛衰も亦之によりて定まるものなり」

と謂ふを得べし予曾て或地方に旅行したることあり此地方は人氣甚だ淡泊にして又勇壯活潑なる風を有せり然るに此に隣れる縣は大に之に反し其氣風所謂商人氣風にして体面上甚だ柔和にして常に人に抗することなく服從するが如き態度を裝ふと雖も結局其行爲を觀察するときは裏面に於ては飽まで實業上に於て自己の勝利を保たんことを求むる風習ありたりき今前者を以て甲と定め後者を

以て假りに乙と定むるときは表面上に於て甲なるもの常に乙なるものを屈せしむるが如く想ひて自ら尊大に構ふと雖も其實利に於ては常に乙者の利用に供せられつゝある者なりとの說話を聞けり之を以て之を見れば今後の社會の狀態は甚だ複雜にして實に隣縣人と其風俗習慣の異なるを見る可のみならす一國民と他國民との間に於て種々複雜なる關係を生し愈々萬人万樣の實を明にすへけれは假令軍事上に於て他國民を征しれば之を以て直ちに安心すべきに非ず此れ素より吾人の大に賀すべきとなり然りと雖も假令軍事に於ては幸に成功することあるも實業上に於て失敗するときは結局國民は衰亡するの外なきものと知るべきなり之を以て之を見れば國民の盛衰を定むる所のものは獨り勇氣にあらず之れと共に大に智略を要するに至るべし即ち之と同時に大に實利的思想の發達を要すべきなり素より社會將來の狀態は獨り勇氣と智略とのみを以て査定すべきにあらず武備あれば必す文事あり或は智略を以て德となす者あるべく或は着實を以て德と認むるものあるべし常あり權あり平あり變あり而して國民の職となす所のもの亦一樣ならず當に王侯卿大夫の階級あるのみならず假令ひ同一階

級のものと雖も士農工商の差別ある以上は「人は道によりて賢し」とも云ひて夫れ〳〵其資格及天職の異なるに隨ひて守る所も亦同じからざる可ければ一時は一時よりも複雑に趨き之を一括して倫理政策の骨子を定むると到底黄河の澄むを俟つに均しかるべし此故に予は倫理政策の骨子を豫料するに際して卿か國民進歩の萌芽に就て之を探らんとす若し國民進歩の萌芽にして豫め之を窺ひ知り得へくんば之に由て倫理政策の骨子を定むるも亦容易なればなり然り而して國民進歩の萌芽とは他なし吾國民の精神界中に埋沒して國民の元氣を鼓吹する原動力に外ならす他語を以て之を云へば一國國民の品性と稱するも殆ど大差なかるべし此の故に倫理政策か如何なる發達をなすへきかは結局國民の品性を研究することに由て初めて達し得らるへき問題なれば此時に當りて吾帝國臣民の品性は果して如何なるものなるかを査察することは強ち無用の事にはあらずと信ず

倫理問題と國民の品性

品性とは所謂(Character)の事なり此の Character とは何ぞや之れ吾人が漠然理解するの語にして今若し之を説明することを要せらるゝに於ては大に困難を感ずる

所なり然りと雖も其顯著なる性質を擧げんか此れに積極消極の二方面あり先つ品性は消極的に活かざるべからず情慾を制することゝ即ち之れなりさきに寡慾主義の不可なることを論し今又此の如く消極的品性を呶々する所以のものは大に談者をして前後矛盾なるやの感を起さしむるに似たるものあるべしと雖も之れ決して矛盾したるの意にはあらず情慾を制するとは決して之を解脱せんとするにには非らず必竟其不規律不整頓なるを制して規則的規律的に向けんとすることを勉むるを云ふなり假令ば男女の關係に就て見るに可賤の酌婦に由て愉快を感ずるが如きは素より之れを制せる可らざる一夫一婦の秩序を正し又た吾人の朋友とするに耻ぢざる淑女の家に於て交際を求むるが如きは當に之を制抑せざるのみならず却て之を奬勵せんとするものなり或は飲酒賛澤に耽るが如きは大に之を抑屈せざる可らずと雖も之れ又他の方面に於て整頓したる家庭に整頓したる家屋を有し高尚なる快樂を求めんが爲めに身分相應の裝飾を用ひ或は又趣味を高尚ならしむる所の遊藝を樂しむが如きは大に裝勵する所なり此の故に人は先づ自己の情慾に沈溺し不規律不整頓なる快樂に耽らさる様心掛くべし是れ即

吾國民の品性養成の二方面

消極的方面なり積極的方面に於ては進取の氣象を有せざる可らず小事に滿足せず命のあらん限りは益々進歩する所の勇氣を失はざるとを勉めざる可らず只之を實行するに於て一段より五段まで乃至七段と飛ふが如きとはなさず順次に其秩序階級を追ふて進むの氣象なかる可らず此の如きは望んで得らるへきことに非ず恐らくば之れ人種に固有なる品性にして天然自然のものならん

吾國民は天性果して進んで己まざるの氣象を有するものなるか將た其分を守り其度を保つの節を有せるものなるか抑二者孰れに其傾向を有するか佛國のルボンの如きは吾國民が積極的品性を有するを難せり然りと雖も是れ恐らくは本邦の歴史を知らす只だ白哲人種以外に進歩的人種なしとの憶斷に止まるものならん古來の歴史に依りて本邦民族の性質を考ふるに其思想の勇大にして進歩の氣象に富みたること今更説明するを要せず只だ一時壓制の爲めに大に之を萎縮せられたるが如き傾向ありたるも之れ一時の變體にして又之を恢復し得べきは吾人の毫も疑を容れざる所なり然らば乃ち軍事の必要あるときは軍事に秀で智略の必要あるときは智略に擢んで嶄然頭角を現はすは是れ吾帝國臣民の最も得意

とする所のものなり換言すれば積極的に活動せんとする品性は帝國臣民固有の性質なり而して倫理及び倫理政策は國運の隆盛を以て其要務となすものなれば宜しく此特性に基きて之を骨子となし之を培養し之を助長し帝國の前途をして益々生々潑々たらしむるを以て肝要なる任務と爲さゝる可らず一言以て之を蔽へは曰く帝國民庶衆の品性を養成するを以て最も緊要なるものにして而も亦最も捷徑なるものとせざる可らす品性養成に關して尚少しく述ぶる所あらんとす品性養成に直接の關係を有するものは倫理及宗教之れなり前に論じたるが如く宗教は大體の方針に於て迷信的狀態を脱し人文的となるの傾向あり之と同時に又倫理の方面を考ふるに古來我國に於ては德川政府の儀式主義と相合し國民の道德をして大に形式倫理に弊らしめたるやの嫌あり乃ち倫理は禮法にして外部に表はれたる行爲をのみ支配するものなるかの如くに思はしめ往々其精神を忘れ外觀的に流れしめたるは蓋し疑ふ可らざる事實なるが如し此の如き道德は精神なき抜殻の如きものなり之れに精神なかる可らす乃ち道德の本源たる人道に對して一種の仰望的感情なかる可からず外部

第十一章　本邦將來の發達に關する意見

に表はれたる禮法の如きに至ては寧ろ其高尚なる倫理感情の表出に外ならざるものなり之を以て之を見れば倫理も亦た一種の宗教的狀態を有せざる可らず故に宗教は人文的に近寄り倫理亦宗教に近寄り將來は宗教と倫理と相近寄るの傾向あり又人爲的に之に近寄することを勉めさる可らさるなり此點より之を考ふるときは在來の宗教は甚しき腐敗を矯正するは勿論の事なりと雖も直ちに之を撲滅し得べきものに非す然りと雖も只た望む所は此等宗教の益々人文的となり又た倫理は益々人道に對する仰望を發達し此意味に於て宗教に近寄ることは蓋し社會發達の正道なりと信ずるが故に此方針を以て品性を養成するとを望むものなり

實際の教育界に對して

終りに尚一言す可きは實際の教育界に關する予の意見にして現今の倫理教育は如何に爲すべきやの問題は長く教育界に横はりつゝあるものなりと雖も未だ滿足なる解釋の出でたるを見ず之れ種々の方面より研究するの必要ありと雖も其一の解釋として予の平生抱持せる所を述ぶれは乃ち倫理問題の困難なる點は左の二點にありと信ず

（一）如何なる主義を以て如何なる方向に向て國民を教育せんかの問題にして之れ所謂倫理政策上の理論的方面と云ふも可ならんか

（二）倫理教師となる人に乏しきこと之なり

以上の二問題は孰れも輕重あるにあらす實に重要なる點にして亦困難なる點なることは疑ふ可らずと雖も然れとも國民の倫理を重じ品性養成の必要を認むるに於ては此問題を解釋するに一歩を進むることを得べし乃ち各中學は倫理專門の教師を聘し之を他の教師よりも比較的に重んじ之を遇するに校長全等以上の待遇をなし少しにても時間を利用して他の學科を搪當せしむるか如きは之を廢し倫理教師は全力を學生の品性養成に盡くす可きものとなし一週一時間の倫理講義の外に種々の方法を設けて學生に近づき之を養成するの方法を講すべきなり而して若し尚ほ餘力あらば倫理教師は其村落或は市町村の青年に對し社會的教育を施し廣く人民一般の教育に注意するを以て任とするときは倫理教育のみを專問となすも殆ど一人の全力を盡して尚且つ充分に其任務を果す能はざるもの存するなり然るに今日は地方の經濟及其他の事情の爲めに倫理教師は英語の

受持をなし或は其他の受持をなし漸く一週一時の講義をなすが如くんば國民品性の養成は到底望む能はざる所なり經濟事情に托して高級の倫理教師を置かさるが如きは其實國民は未だ品性養成の必要を認めざるものなり國家發達の根本は數學に非す歴史にあらす品性養成に在るものなることを自覺するならば僅かなる經濟上の故障の如きは論ずるに足らざるものなり現今の狀態を考へ將來の國民發達の順序を思ふときは予は只だ國民が品性發達の必要あることを自覺せんことを希望して已まざるなり一度之を自覺せんか之に對する政策の如きは易々たるものと云ふ可きなり

倫理及宗教 終

明治三十三年十月廿五日印刷
明治三十三年十一月十日發行

倫理及宗教奥付

正價金四拾錢

著者 元良勇次郎

發行者 岸野英 東京市神田區錦町二丁目

印刷者 多田三彌 東京市麹町區内幸町一丁目五番地

印刷所 惠愛堂 東京市麹町區内幸町一丁目五番地

發兌元 勉強堂書店 東京神田區錦町二丁目角

發賣元 東京堂書店 東京神田區表神保町

版權所有 不許複製

9/54

特約大販賣所

東京神田區雉子町	岡崎屋書店
東京日本橋區通三丁目	林平次郎
東京神田區裏神保町	上田屋書店
大坂備後町	吉岡平助
名古屋本町	川瀨代助
京都佛光寺通	東技律書房
熊本	長崎次郎
筑前博多	積善館
越後長岡	覺張治平
越後長岡	目黑十郎
信州長野	西澤喜太郎

文學博士故小中村清矩先生遺稿（十一月中旬出版）

官職制度沿革小史

全一冊菊判洋裝美本
正價金七拾錢
郵稅拾錢

故小中村翁が古典に通達せられたるは天下の知る所なり本書は博士在世の折後進者の爲めにとて親しく筆を執られたるものにして上古より近世德川職制に終る引證正確にして各項に評を加へ且つ文章平易なるを以て何人にも會得せらるべし學者敎育者は勿論苟も史學に志ある者の參考としては愷かに一頭地を拔く者あるを信ず其內容は大略次の如し

●第一編建國より孝德天皇維新に至る●第二編孝德天皇より鎌倉幕府時代●第三編鎌倉幕府時代●第四編京都幕府時代●第五編戰國時代●第六編江戶幕府時代

文學博士故小中村清矩先生遺著（製本既成）

國史學のおもむき

一名國書解題

全一冊 和裝美本
正價 金五拾錢
郵稅 六 錢

81
575

此書は故小中村翁が上古より徳川の末年に至る迄の國書を解題して之れに對する短評を加へ國史を學ぶ者の栞とせる者にて博士が遺著として曾て故書に頒たれたる書なり中學以上の學生諸君は勿論苟も國史に志ある學者受驗者等最良の參考書なり。其の目次左の如し

●第一章總說●第二章古史類●第三章正史類●第四章軍記類●第五章武家記錄類●第六章通史類●第七章法制に關する書●第八章通史類●第九章朝儀に關する書●第十章有職○古實に關する圖書●第十一章系○傳に關する譜記●第十二章地理書及び地圖類

諸名士大家傑作集（製本既成）

全一冊　美麗珍奇の寫眞十餘枚挿入

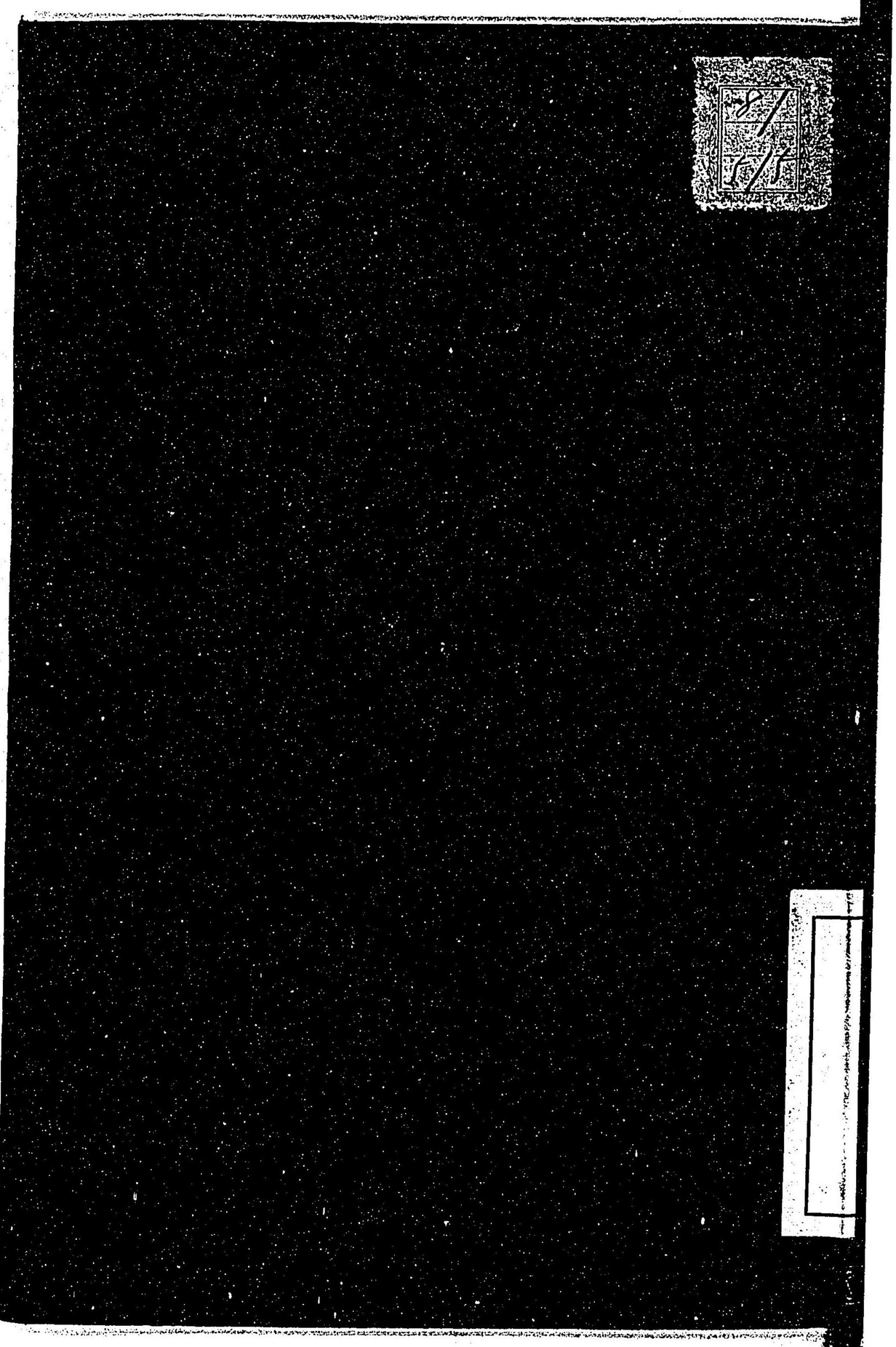
正價金二十錢

郵稅四錢

新體詩歌　紫紅集

自然の粹を愛し造化の妙を樂むは詩人歌客の生涯なり、本書は明治文壇の名士當世雅客の大家が最新の詩歌につきて其傑作を蒐めたるものにして多情多恨の月自ら卷中に藏し新體詩數百和歌亦た之れに適へり特に「時々名所舊跡及び大家の書翰」を挿みて其趣味を深からしめ和歌にありては中村秋香落合直文佐々木信綱黒田清綱等の大家あり新體詩にありては島崎藤村與謝野鐵幹坂正臣薄田泣菫武島羽衣等の名士ありて前後東西並で名吟を戰はされたる等皆以て本書の獨特の價値ある點なりとす世の才子佳人苟しくも斯道に志ある諸彦は速かに一本を購ふて座右の慰とせん事を

27

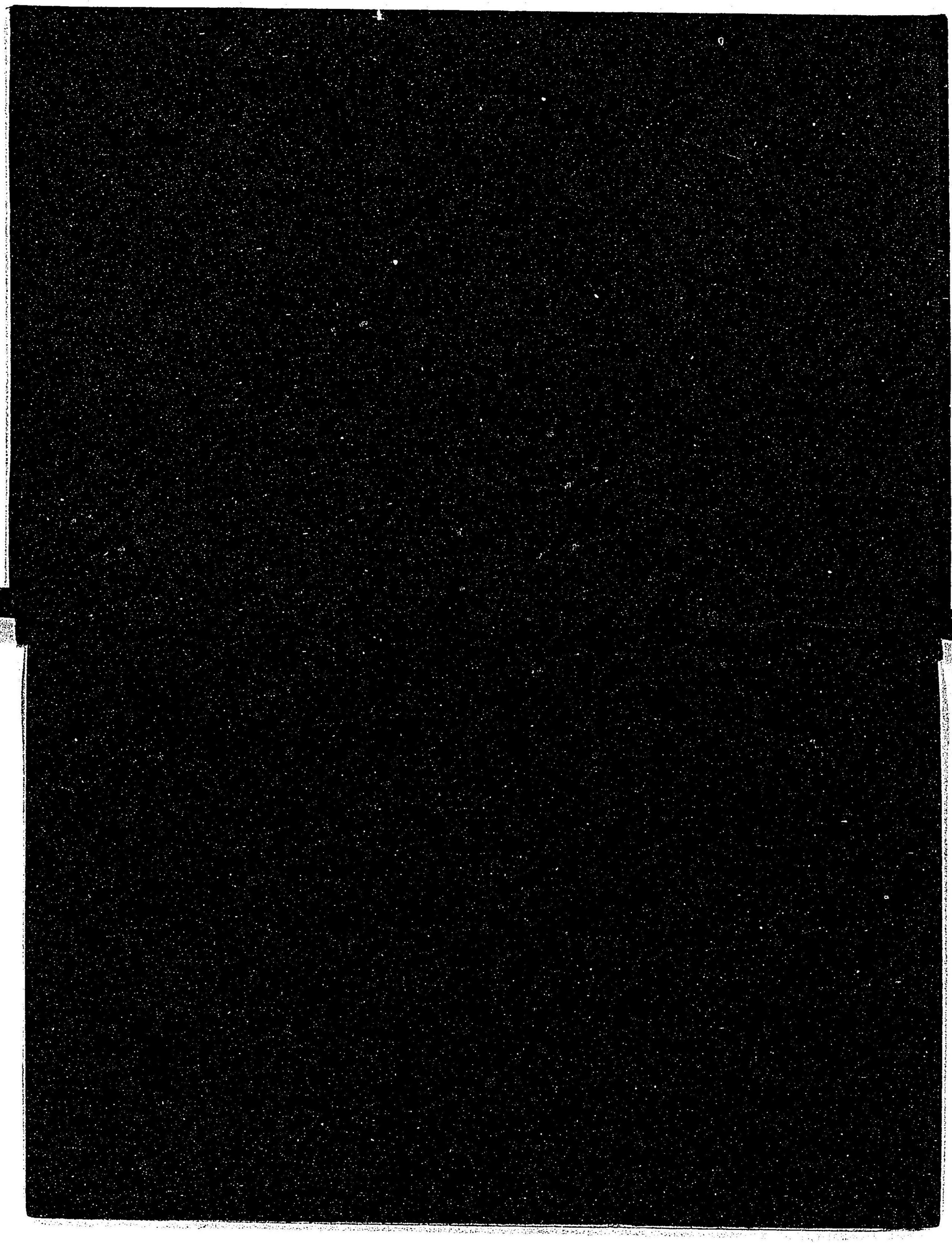


013781-000-8

81-515

倫理及宗教（現今将来）

元良　勇次郎／著

M33

ABA-0271